

<授業実践1>「現代の国語」話すこと・聞くこと

1 単元名

聞き手に伝わりやすい表現で話す力を身に付けよう

2 指導目標

(1) 単元の目標（下線部：関連する学習指導要領の指導事項）

・話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色を踏まえ、正確さ、分かりやすさ、適切さ、敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し、使うことができる。（〔知識及び技能〕(1)のイ)

・話し言葉の特徴を踏まえて話したり、場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど、相手の理解が得られるように表現を工夫することができる。（〔思考力、判断力、表現力等〕A「話すこと・聞くこと」(1)のウ)

・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。（「学びに向かう力、人間性等」）

(2) 言語活動

ア 言語活動

クラスメイトに向かって自分の考えを発表する。

イ 言語活動のねらい

聞き手に伝わりやすい表現という観点を通して、自分の意見を裏付ける「理由」「具体例」「補足説明」などを使って話す能力を身に付けさせたい。また、聞き手の反応を感じ取りながら「語句の選択」や「文の長さ」の表現を工夫すること、更に「表現の言い換え」や「内容の強調」までも意識して取り組むことを指示したい。

(3) 教材

ア 教材

「伝わるように話そう」（『新編 現代の国語』大修館書店）を参考に作成したワークシート

イ 教材観

ワークシートは、「話の始め」「伝えたいこと」「理由、具体例、補足説明」の構成に従って、自分の意見を発表できるように作成した。「理由、具体例、補足説明」などを考えさせる際には、「聞き手に伝わりやすくするために表現をどう工夫するか」という問いかけを強調し、相手に伝わりやすい表現について考えるよう工夫した。また、発表時に相手の反応を感じ取るために視線を聞き手に向けさせたいと思い、発表原稿はあえて箇条書きなどのメモ程度になるようにした。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

生徒は伝わりやすい表現で話している動画を各自で探し、自分にとってのグッドモデルを紹介し合う活動を単元導入時に設定した（主体的）。

伝わりやすい表現で話す力が定着するように、テーマを変えながら、ペアになって話す練習を複数回実施した。こうしたペアの活動を通して、伝わりやすい表現について振り返る場面や全体発表に向けて表現をどう工夫するかについて考える場面を設けた（対話的）。

全体発表後に、単元全体を通じて、伝わりやすい表現について自分なりに学んだことや気付いたことを振り返る場面を設定した（深い学び）。

3 観点別学習状況の評価

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
話し言葉の特徴や表現の特色を踏まえ、正確さ、分かりやすさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し、使っている。	「話すこと・聞くこと」において、話し言葉の特徴を踏まえたり、場の状況に応じて相手の理解が得られるように表現を工夫したりしている。	全体発表に向けて、相手の理解が得られるように表現を工夫しようと粘り強く取り組み、自らの学習を改善しようとしている。

(2) 評価方法

ア 知識・技能

ワークシートの記述、全体発表時の行動によって評価する。

イ 思考・判断・表現（話すこと）

ペアによる発表練習時の行動、全体発表時の行動によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
「話の始め」「伝えたいこと」を述べた後に、「伝えたいことを裏付ける理由、具体例、補足説明など」を付け加えて話している。	「話の始め」「伝えたいこと」を述べた後に、「伝えたいことを裏付ける理由、具体例、補足説明など」を、聞き手の反応に合わせて表現を工夫しながら話している。	「話の始め」「伝えたいこと」を述べた後に、「伝えたいことを裏付ける理由、具体例、補足説明など」を、表現を工夫しながら話している。	「話の始め」「伝えたいこと」を裏付ける理由、具体例、補足説明などの一部分は話している。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

ペアによる発表練習時の行動、ワークシートの振り返りの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
伝わりやすい表現が身に付くように目的意識をもってペアでの話す練習に取り組んでいる（α）。	相手の理解が得られる表現になるよう粘り強く取り組み、複数の工夫をしようとしている。	相手の理解が得られる表現になるよう粘り強く取り組み、工夫しようとしている。	ペアの練習に取り組もうとしている。
全体発表に向けて、表現をどのように工夫すればよいか、学んだり気付いたりしている（β）。	ペア活動や発表を通して、自らの改善点に気付き改善に努め、今後の学習に生かそうとしている。	ペア活動や発表を通して、自らの改善点に気付き、今後の学習に生かそうとしている。	ペア活動や発表を通して、自らの改善点に気付こうとしている。

※ α・βは、それぞれ「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」とする。

4 単元の指導計画（配当6時間）

次 (時間)	学習活動	言語活動における指導上の留意点 *生徒への支援の手だて	評価上の留意点 ◇観点 □点検・確認■分析 *「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第1次 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ・「伝わりやすい表現」で話している動画『My Good Model』を4人グループで紹介し合う（ワークシート1）。 ・教科書の内容を参考にしつつ、ワークシートに取り組み、「伝わりやすい表現」について理解を深める（ワークシート2）。 ・「伝わりやすい表現」を意識して話す内容を考える（ワークシート2）。 ・発表原稿を箇条書きで書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し言葉の特徴を踏まえた伝わりやすい表現方法について、個々の経験の共有を促す。 ・ワークシート1は事前課題とする。 ・タブレット端末を使用し、1人10分程度で紹介動画を見せ合う。 *背面黒板にアラームを投影する。 ・聞き手全員が、他の誰かに紹介できるくらいに理解できるような内容を考えさせる。 ・発表時に原稿を読むだけにならないように留意する。 *「理由、具体例、補足説明」の欄を点検時に、「全員に伝わるようにするにはどう表現すればよいのか」という観点から声かけする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇(知) □「記述の点検」(ワークシート2) *教科書の該当ページを確認するよう助言する。
第2次 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・発表の評価について確認する（ワークシート3）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表のルーブリックについて指導者がモデルを示しながら説明する。 *太線で困った内容（本単元で特に身に付けさせたい力）について強調する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇(思)(態) □「行動の観察」(発表の様子) *記述の様子を確認し、「伝えたいことを裏付ける理由、具体例、補足説明など」を工夫するよう助言する。

	<ul style="list-style-type: none"> ペアでの発表練習を三つのテーマについて繰り返し行い、その活動を振り返る（ワークシート3）。 全体発表で表現をどう工夫すればよいかについて考える（ワークシート3）。 	<ul style="list-style-type: none"> テーマは事前に生徒から募集したものから指導者が三つ選出する。同じテーマで2回発表させる。1回目は座席の隣同士で発表し合い、2回目以降は座席の列をずらして実施する。 振り返りは、言葉による表現について行うように強調する。 *「全員に伝わるようにするにはどうすればよいか」という観点から声かけをする。 	<p>◇(態)</p> <p>□「記述の確認」(ワークシート3)</p> <p>*次時に向けての工夫を、具体的なセリフで記述するように助言する。</p>
第3次 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 全体に向けて発表する。聞き手は発表を聞き終えるごとに聞き取りシートを記入する（ワークシート4）。 単元全体を通して「伝わりやすい表現」について振り返る（ワークシート4）。 	<ul style="list-style-type: none"> 聞き手は発表者に視線を向けて聞き、聞き終えてから聞き取りシートへ記入させる。 *背面黒板にアラームを投影し、発表時間、聞き取りシートへの記入時間のタイムキーパーは指導者が行う。 伝わりやすい表現について、自分なりに学んだことや気付いたことなどを振り返らせる。 	<p>◇(思)</p> <p>■「行動の分析」(発表の様子)</p> <p>◇(態)</p> <p>■「記述の分析」(ワークシート4)</p> <p>*次の単元に向けて、何ができるようにになりたいか記述するように助言する。</p>

5 本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

クラスメイト全員に伝わるように表現を工夫して発表する。

(2) 本時の具体的な評価規準

「話の始め」「伝えたいこと」を述べた後に、「伝えたいことを裏付ける理由、具体例、補足説明など」を、表現を工夫しながら話している。

(3) 本時（全6時間中の6時間目）の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入 (5分)	・本時の目標、活動内容を確認する。	①前時の内容と本時の活動（ワークシート4）を確認する。	①発表は名簿番号順とするが、先に発表したい者を優先とする。
展開 (30分)	・全体に向けて発表する。	②全体に向けて発表する（1分間）。	②発表テーマは練習した三つの中からランダムで与える。

		<p>③聞き手は、発表を聞き終えるごとにワークシート4（聞き取りシート）を記入する（1分30秒）。</p> <p>②、③を全員が終わるまで繰り返す。</p>	<p>③聞き手はメモを取らず、発表者に視線を向けるように指示する。発表者は聞き手の反応を感じ取りながら発表することを目標にさせる。</p> <p>発表時間、聞き取りシートへの記入時間のタイムキーパーは指導者が行う（背面黒板にアラームを投影）。</p> <p>■発表の様子を見て評価をする。また、記録用として発表の様子をタブレット端末で撮影しておく。</p>
<p>終結 (15分)</p>	<p>・単元全体を通した振り返りをする。(ワークシート4)</p>	<p>④伝わりやすい表現について、自分なりに学んだことや気付いたことなどを振り返る。</p>	<p>④他の人の発表を聞いたことも踏まえて、伝わりやすい表現について振り返らせる。</p>

6 研究の実際と考察

(1) 主体的に学習に取り組む態度の評価について

ワークシート3「振り返り①」「振り返り②」において、表現を工夫しようとしている内容が記述されているかを確認し、「粘り強い取組を行おうとする側面（α）」を評価した。「表現を工夫しようとしている内容」と認めた生徒の例「(相手が知らなそうな内容なので) 例え話を二つ話すようにしたい」「いろいろな音楽と話してしまったのを、具体的に、洋楽のロックで、ブルーノマーズの曲と話すようにしたい」などである。こういった内容が確認できればB評価とし、その工夫内容が複数ある場合はA評価とした。言葉による表現の工夫内容が確認できない場合はC評価(生徒例「緊張してしまったので次はゆっくり話したい」とし、「あなたが話す内容の中で、相手が知らなくて詳しく言った方がよい内容は何か」「相手に伝わりやすくするためにどんなセリフだとよいか」などと助言し、言葉による表現に着目させるように指導した。

ワークシート3「全体発表のとき、クラス全員に内容が伝わるようにするためには、表現をどう工夫すればよいですか」の項目において、伝わりやすい表現についての工夫内容が記述されているか、さらに、ワークシート4「①練習のときに設定した『全体発表に向けた自分の目標』は達成できましたか」の項目において、目標達成に向けて表現を改善しようとした内容が記述されているかを分析し、「自らの学習を調整しようとする側面（β）」を評価した。「伝わりやすい表現についての工夫内容」と認めた生徒の例は「難しい言葉を簡単な言葉に言い換える」「例え話をする」などである。こういった記述がある場合はB評価とした。こうした記述内容に加え、ワークシート4の①の項目に「表現を改善しようとした内容」が確認できる場合はA評価とした(生徒例「たくさんの情報を伝えると聞いている側は分かりにくくなってしまっているので、選びながら詳しく伝えるようにした」「ただ具体例を言うのではなく、みんなにとって身近な内容やふだん目にするような例で例えるようにした」)。言葉による表現に着目できていない内容はC評価とした(ワークシート3)。

(2) 思考・判断・表現の評価について

第3次の全体発表における行動を分析し、思考・判断・表現を評価した。生徒の発表内容を、「話の始め」が話せているかどうか、「伝えたいこと」が話せているかどうか、「伝えたいことを裏付ける理由、具体例、補足説明など」が話せているかどうか、の三つを確認項目の基本とした。これら三つの項目を順序立てて話せていた場合はB評価とした。これに加え、聞き手の反応に合わせて表現を工夫した内容が見受けられた場合はA評価とした（生徒の発言例「みなさん、フィリピン料理のキニラウって知っていますか。キニラウとは、日本料理で言うとマグロの刺身です。（聞き手の反応を感じ取っている様子が、間や表情から感じられた。クラス全員がまだイメージできていない様子だったと感じ取ったらしく、追加で）マグロの刺身をキュウリなどの野菜とお酢で和えてマリネみたいにしたものなんです」。「話の始め」「伝えたいこと」「伝えたいことを裏付ける理由、具体例、補足説明など」の一部分しか話せていない場合や、話す内容の順番が理由から話し始めてしまったなど、順序立てられていない場合はC評価とした。

複数の指導者が指導に携わったとしても評価の基準が統一できるように、話の内容の質を中心に評価するのではなく、話せていたかどうかという観点を中心に評価するようにした。基本的には、生徒の発表を聞きながらリアルタイムで評価を行ったが、記録確認用としてタブレット端末を後方に配置し、撮影するようにした。また、スムーズに発表や聞き取りの活動が行えるように、時間計測として、背面黒板に、タブレット端末搭載の「アラーム&クロック」のアプリを投影した。1分間でアラームが鳴るように設定し、アラームが鳴ったら、指導者が指示を出さずとも活動の切り替えを行うように指示したおかげで評価に専念することができた。

7 研究の成果と課題

思考・判断・表現の評価がA評価の生徒の割合は15%、B評価は80%、C評価は5%という結果であった。また、事前に原稿を作成して発表させていたときよりも、聞き手に視線を向けた状態（発表時間中全ての時間にわたって視線を向けている状態）で話すことができるようになった生徒は95%に上昇した。これらの結果から、聞き手に視線を配りながら、伝わりやすいように表現を工夫して話すことができるようになったと言える。しかし、聞き手の反応を感じ取りながら、それに合わせて臨機応変に表現を工夫する力は十分に身に付いていないと感じた。この課題を改善するために、今回、A評価とした生徒たちが発したセリフをグッドモデルとして例示し、聞き手の反応によってどのように表現を工夫すればよいか、について考える活動を設定していきたいと考える。

<授業実践2>「現代の国語」書くこと

1 単元名

「理数探究基礎」の発表内容を意見文にしよう

2 指導目標

(1) 単元の目標

・文、話、文章の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解することができる。([知識及び技能]

(1)のオ)

・情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うことができる。([知識及び技能] (2)のエ)

・目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすることができる。([思考力、判断力、表現力等] B「書くこと」の(1)のエ)

・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。([学びに向かう力、人間性等])

(2) 言語活動

ア 言語活動

「理数探究基礎」で実践した探究課題を、意見文の形で表現する活動。([思考力・判断力・表現力等]

B「書くこと」(2)のウを参照)

イ 言語活動のねらい

「書くこと」の指導事項については、本単元の前に、大岡信「言葉の力」、山崎正和「サイボーグとクローン人間」(『探求 現代の国語』桐原書店)を使用し、題材の設定から考えの形成、記述まで学習を終えている。よって、本単元では、「理数探究基礎」で実際に生徒自身が行った研究調査を根拠として意見文を書き、それを推敲することで、相手に伝わる説得力をもった意見文を書く力や、データを文章化する力を身に付けさせたい。

(3) 教材

ア 教材

※「現代の国語」で使用する教材

・「表現の手法5 意見文を書く」(『探求 現代の国語』桐原書店)

※「理数探究基礎」と共通で使用する教材

・マイナビキャリア甲子園2023年度練習教材一式(株式会社マイナビ提供)

(「駅前に素敵なお店を作ろう」「オリジナル校則を作ろう」「小学校にオリジナル科目を作ろう」の中から班で選択する。「理数探究基礎」の授業では各班で情報収集を行い、3学期に提案内容をプレゼンテーションする予定である。)

イ 教材観

生徒はまとまった量の文章を書く経験が薄く、苦手意識をもっている生徒が多い。意見文の型を提示することである程度は心理的な負担を軽減しつつ、ふだんの言葉遣いとは異なることを意識して使用させたい。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

今回の活動では、「理数探究基礎」で行ったグループ活動を題材にすることで、同じ題材の生徒と助け合えるようにした。文章を推敲し合う活動により、各自の文章を振り返って行いたい。

3 観点別学習状況の評価

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現（書くこと）	主体的に学習に取り組む態度
文、話、文章の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解している。 情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使っている。	「書くこと」において、目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりしている。	学習の見通しをもって、意図が相手に伝わるかどうか読み手からの助言を踏まえて推敲し、書き直す活動を通して、自分の考えが伝わるよう、粘り強く構成や表現を工夫しようとしている。

(2) 評価方法

ア 知識・技能

定期考査における記述問題によって評価する。

イ 思考・判断・表現（書くこと）

ワークシート2の記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直している。	読み手の指摘を踏まえ、具体的な箇所に着目しながら、自分の文章の特長を捉え、説得力のある意見文を書くための課題を記述している。	自分の文章の特長を捉え、分かりやすい意見文を書くための課題を記述している。	意見文を書くための課題を記述している。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

ワークシート2の記述などによって評価する。

	評価A	評価B	評価C
粘り強く推敲に取り組もうとしている (α)。	/	指摘された推敲箇所について検討し、文章を再度書き直している。	指摘された推敲箇所について検討している。
自分の文章の課題を捉え直そうとしている (β)。	読み手の指摘を踏まえ、具体的な箇所に着目しながら、自分の文章の特長を捉え、説得力のある意見文を書くための課題を立てようとしている。	自分の文章の特長を捉え、分かりやすい意見文を書くための課題を立てようとしている。	意見文を書くための課題を立てようとしている。

※ $\alpha \cdot \beta$ は、それぞれ「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」とする。

4 単元の指導計画（配当3時間）

※「理数探究基礎」の授業において、マイナビキャリア甲子園導入教材を利用し、各班で課題を選び、調査研究活動を実施している。情報収集が終わった段階で、「理数探究基礎」でプレゼンテーションの準備を行うと同時に「現代の国語」で「意見文を書く」単元に取り組む。

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点 *生徒への支援の手だて	評価上の留意点 ◇観点□点検・確認■分析 *「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第1次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ・「表現の手法5 意見文を書く」を読み、意見文の型を学ぶ。 ・ワークシート1「校正確認メモ」に、「理数探究基礎」で設定した「課題」と、それを解決するための「提案（意見）」を記入する。 ・「提案（意見）」の根拠となるデータを整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの書く活動を振り返り、教科書の例文を参考に、説得力のある効果的な文章の構成を復習させる。 ・「理数探究基礎」で実施しているプレゼンテーションの資料を適宜参照させる。 ・取り組んだことを全て詰め込む報告書を書くのではなく、相手に自分の意見や提案を納得させるための材料を抽出させる。 * 同じ探究班の生徒と相談させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇（思） □「行動の観察」 *教科書の「ポイント」部分に着目させる。
第2次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・文章構成を考える。 ・「提案（意見）」の根拠となるデータを意見文の形に書き換える。 ・タブレット端末を利用し、各自で Microsoft Word（以下 Word）を用いて意見文を書く。 ・作成した意見文をクラウド上に提出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料「意見文提出のルール」を配付し、作成に関する注意事項を伝える。 ・これまでの「書くこと」の学習で注意したことを踏まえて書く。 * 基本は個人作業だが、つまづいている生徒には同じ探究班の生徒と相談させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇（思） □「記述の点検」（意見文） *前単元で学習したパラグラフライティングなどを用いるよう助言する。
第3次	<ul style="list-style-type: none"> ・意見文を交換して読む。分かりにくかった部分などを指摘し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・読み手の生徒は推敲した方がよいところには下線を引き、ワークシート2「推敲用シート」にコメントを書き込む。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇（思）（態） ■「記述の分析」（推敲後の意見文・推敲用ワークシート）

(1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・意見をもとに自分の文章の特長を捉え、意見文を書き直す。 ・書き直したものを再度提出する(任意とし、完了した者のみ提出可)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手元に戻ってきたワークシートを見て、生徒は自分の文章の特長を捉え直して書き込む。 ・コメントをもとに意見文を書き直す。 <p>*場合に応じて同じ探究班の生徒と相談する。</p>	<p>*教科書に掲載されている「文章の推敲」四つの観点を確認させる。前単元で使用した文章校正ワークを見直させる。</p>
-------	---	--	--

5 本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直すことができる。

(2) 本時の具体的な評価規準

読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直している。

(3) 本時(3時/3時間)の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入 (5分)	・本時の学習内容を知る。	①単元の目標と言語活動について確認する。	①ワークシート2「推敲用シート」を基に推敲し合うことを伝える。
展開 (40分)	<ul style="list-style-type: none"> ・意見文を交換して読む。 ※タブレットに意見文を表示させたものか、提出された意見文を印刷したものを用意する。 ・指摘された箇所を読み、グループ内で話し合う。 ・自分の文章の特長を考える。 ・意見文を推敲し、書き直す。 	<ul style="list-style-type: none"> ②クラスで3人グループを作成し、提出された意見文を回し読みする。 ③ワークシート2「推敲用シート」のチェックリストに従い、相互に読み合う。推敲した方がよいところには下線を引き、推敲用ワークシートにコメントを書き込む。 ④2名から指摘された箇所を読み、グループで推敲箇所について確認する。 ⑤ワークシート2「推敲用シート」の下部に、自分の文章の特長、今後同じ活動をする際に気を付けたいことを考えて記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ②交換する相手が「理数探究基礎」の班員にならないようにする。できれば自分の班とは別のテーマで探究している生徒になるようにする。 ③推敲することがないという生徒(初稿段階でよくできている生徒)のものは、教員が読んでチェックする。ただし、よかった点のコメントは生徒に記入させる。

終結 (5 分)	・意見文を推敲し、書き直 す。	⑥新しい単元に入ることを確認 する。	■ワークシート2を回収し、 ループリックを用いて「記述 の分析」により評価する。
----------------	--------------------	-----------------------	--

6 研究の実際と考察

(1) 意見文を書く活動に関して

これまで授業内で「書くこと」の活動を行う際、ある程度の量がある文章を書こうとすると、内容を考える段階に時間が取られることが多くなるため、解消できないかと考えていた。本単元では「理数探究基礎」の授業内で時間を取って意見（主張）の形成を行っており、「現代の国語」では意見文を書く活動に限定したため、説明後すぐに書く活動に入ることができた。しかし、Wordやタブレット端末の使用技能について生徒間で差があり、指導の中心になるはずの、書くことの指導以外に時間がとられた場面もあった（なお、本校では「情報」の履修は2年次である）。

(2) 意見文に関して

細かい注意事項を配付したが、段落の数や構成など、見本を逸脱した生徒もクラスに数名見られた。内容に関しても、主張や論拠を書く段落において、次のような問題がある文章が散見された。

- ・意見文の形になってはいるが、「理数探究基礎」で求められた提案を記述していないもの。例えば「新しい校則を作ろう」がテーマの班で、新しい校則を具体的に提案せず、「校則は生徒の自主性を育てるべき」という意見を書いている、など。
- ・個人の主観や感覚的なものを根拠として書いているもの。また、収集した情報を適切に数値化できていないもの。教科書所収の「意見文を書く」に掲載されている見本の根拠が、数値を用いたものではなかったことが影響しているのではないと思われる。
- ・そもそも根拠として成立しない情報や、適切ではない収集方法で入手した一次情報を提示しているもの。

探究活動で取り扱う情報については、「現代の国語」でも、教科書所収の「問いの立て方とオリジナリティ」（上野千鶴子）を用いて指導していたが、「理数探究基礎」の活動とも並行し、継続的に指導する必要を感じた。

(3) 推敲活動に関して

推敲の項目として「内容」の部分に関しては、うまくいかない部分があった。上記(2)でも触れたが、こちらが想定していたものから外れた内容を書く生徒が多かったこと、生徒自身の推敲する力（与えられた課題と意見文に書かれた内容の距離を測る力）が不足していたことが主な理由である。しかし、「構成」「表現」分野に関しては、「書くこと」の単元で繰り返し指導をしてきたためか、ある程度指摘することができていた。違和感のある文の指摘にとどまり、ワークシート2では「どう書き直せばよいか」という指摘までは至っていないものが多数であったが、第3次の授業時間の終わりに、互いに相談し合う姿が見られた。

(4) 評価について

本単元において、「思考・判断・表現」の評価と、「主体的に学習に取り組む態度」の「自らの学習を調整しようとする側面」はワークシート2の下部の記述において同時に評価できるものとして評価を行った。これは本単元の活動の主眼を「自分の文章の特長や課題を捉え直す」ことにおいているため、同一項目で同時に評価できると判断したためである。生徒の意見文自体は評価の対象としなかった。

繰り返しになるが、表現する内容そのものに関して問題があったため、実際の評価の場面では、ループリックに基づいて想定していた具体的な基準を多少見直す必要に迫られた。実際には「構成」「表現」

については自分の文章を捉え直すことができていた生徒について、「思考・判断・表現」の評価をB評価とすることとした。

以下は評価の対象としたワークシート2の記述である。(下線は授業者)

【生徒ア】

一文が長くて分かりにくいっぽい。かぎ括弧や句点をもっとふんだんに使うことで頭に入っていくやすい文になると思ったので、推敲のときに気を付けたい。

【生徒イ】

「～考える」という文末が最後の方に多く、変な感じがしてしまうから、文末を変えたりして読み手が違和感がないように推敲できるとよいと思った。最後に改行をしてしまって、推敲してくれた子にも質問されたから、見て分かるようなミスはしっかりと直して文を完成できるようにする。今回はなかったけれど、常体と敬体が混ざってしまったり、言葉を省略してしまったりすることはよくあることだと思うから、今後推敲するときは、そこも注意していきたい。

【生徒ウ】

文章を読むとき、漢字ミスは1回で気付きたい。一文一文しっかりと読み、「話し言葉」「」、「主語と述語」など気付きにくいところを見落とさないようにしたい。

上記のように、他の生徒からのコメントに基づき、具体的に気を付けたいところを述べている生徒をB評価とした。この他、「パラグラフライティングを意識したい」「問いかけの文を多用して逆に分かりにくくなってしまった」など、これまでの単元で行った活動を踏まえて書く生徒や、「データを複数もってきて強い根拠にしたい」「関連性のあるデータをもってきたつもりだったが問題と直結していなかった」など、情報の扱い方の反省を記入する生徒もいた。「自分は分かっているつもりでも、他の人が見ると分かりにくいことを意識できた」「伝えたいことが読み手に伝わらないことがあると気付いた」という記述も多かった。

また、B評価に達した生徒のうち、以下の生徒エ、オのように、「説得力のある意見文を書くための課題」として、実際に文章を書き始める前の段階で注意したい点に言及している生徒をA評価とした。

【生徒エ】

字数配分が適切でなかったため、書いているうちに、あの根拠を追加しよう、あのデータも入れようとどんどん増やしていってしまい、後の段落の方が字数が多くなってしまいました。よって、まずどの根拠を入れるかしっかりと決めてから書き始めようと思いました。

【生徒オ】

データに数値がないところが欠点だと思った。分かりやすく伝えるために引用や根拠が主張に合っているか文章に一貫性があるか推敲し、気を付けたい。自分の文の特徴は、文章量が少ない、予測で書いてしまう、結論を書かず察してもらうような文章になっていることである。自分も書いていて「この文章を入れたい」と思うことがあるが、どのように接続詞をつなげばよいか分からず、はしょってしまうことがあるので、ある程度流れを考え、主張を整理してから書き始めたい。

生徒オは、一年間を通して書く活動に苦手意識を感じている様子が見て取れた生徒である。今回の課題でも、書き上がった意見文に関しては修正すべき点が多々あったが、「ワークシート2」の記述において、文章全体の組み立て方を振り返ることができていると見て取れたため、本単元ではA評価とした。

C評価としたものは、「見直しをしっかりとる」のみで具体的な箇所と言及できていないもの、段落構成の不備をタブレットの仕様を理由としているものなどである。

推敲活動を踏まえて、書き直した意見文の提出は任意とした。第3次の授業内でほとんど書き直しの時間をとることはできなかったが、最終的に書き直した意見文を提出した生徒は40人クラスで5～8人程度であった。ワークシート2の記述内容と書き直した意見文の提出状況から、「主体的に学習に取り組む態度」を総合的に評価した。

7 研究の成果と課題

今回は「現代の国語」の授業担当者が2名とも該当学年の「理数探究基礎」の授業担当者であったため、「理数探究基礎」の指導を踏まえた授業を混乱なく行うことができた。しかし、そうでない場合は、意見文の完成形のイメージを共有して学年でそろって授業を展開していくことが難しかっただろう。また、「理数探究基礎」の進行状況に大きく左右されるため、書き上がった内容も班により大きな差があった。探究活動がうまくいっていない班については、書く前段階のワークシート1の記入が困難な生徒もいた。今回の単元の主眼である推敲活動に大きく関わるため、実施の時期については再検討が必要である。

ただ、「理数探究基礎」の担当者として書き上がった意見文を見てみると、うまくいっているように見えていた班が、実際は課題の理解ができていなかったり、適切に情報を取り扱えていなかったりするなどの問題を抱えていることが分かった。他教科の活動内容と関連させるのは大変であったが、生徒の学びを総合的に見ていくことに大きな利点を感じたため、機会があれば再度取り組みたい。

1年間の締めくくりとして行った活動であるが、本単元までに行った「書く活動」と比較し、文章量が多く取り組みにくい課題であった。生徒の実態に応じ、書く文章の分量を調整して適切な言語活動を実施していきたい。

利用者のニーズ

1年〇組 〇〇 〇〇 (〇班)

名古屋鉄道犬山線『布袋駅』を耳にしたことはあるだろうか。2023年に高架下開発、いわゆるリニューアルが施され、周辺には親子の交流の場となる子育て支援センターや一般企業も多く存在する利用率の高い駅だ。しかし、布袋駅の利用者に話を聞くとその不完全さが見えてきた。どうやら、先ほどの建物に向かう子連れが交流の際に食べられる物の販売や、ゆっくりできる飲食店が足りていないようなのだ。また、家や会社の最寄り駅が布袋駅という人達からは、サッと朝買っていける物がないと聞く。そこで私たちは、布袋駅には利用者が欲するテイクアウトの役割も担いのびのびとした飲食店が必要なのではないかと考えた。

「理数探求基礎」〇組〇班では、布袋駅を週3回以上利用する人々に『布袋駅に満足しているか』のアンケートを実施した。すると半数以上もが「いいえ」と回答したのだ。なぜ、一新され万事順調に見える布袋駅に利用者達は不充実さを感じるのだろうか。その答えは、先程の飲食販売の少なさにある。先述したように『子育て支援センターに向かい、他の親子と交流するときに片手間に食べられる物』や『朝の通勤途中ついでに買えるその日の昼食』、そうした食べ物の販売店が足りていない、子供を連れてのんびりできる飲食店がない、というのだ。そこで私たちはこの問題を一举に解決するべく、その人たちのニーズに合ったパン屋を作ろう、と考えた。パン屋を選んだ理由としては、パンという選びやすく、時間が経っても食べやすい・片手で食べられるものを販売することでいわゆるおやつやちょっとした腹の満たし、その日の朝食や昼食などを手助けできるからだ。また、『一緒に食事をすれば仲よくなる』という心理学の話がある。食事をともにすることで人間性を知り、親近感を感じることができるというものだ。私たちはこの店の中にイートインスペースを作ることこの心理的作用を利用したいとも考える。上記にもある通り、親子の交流の場、つまり親子の多いこの布袋駅周辺に食事を完結できる建物を建てることで親子の手助けになるのは間違いないだろう。更にキッズスペースがあったり、DVDが見られたりすると親同士・子同士の交流の場を新たに設けることができる。加えてパンはご飯よりも含まれる栄養価が高く、子供の発育にもいいとされている。

子供の頃、親、友達、友達の親らとランチに行った記憶はあるだろうか。友達と一緒にキッズスペースで遊んだりアニメを見たりしている時間は、親たちにとっても息抜きの時間なのではないか。反対にそれらの設備がない場合、かえって苦勞するという親が多い。

このように子連れ達にとっての交流や利便性のよさを重視しつつ、テイクアウトなど他の層にとっての利便性も兼ね備えた場所こそが今の布袋駅にとって必要な場所なのではないか。以上の点から、私は布袋駅の周辺にパン屋を作るのが望ましいと考える。

タイムマネジメント

1年〇組 〇〇 〇〇 (〇班)

スマートフォンの普及が進む世の中では、今後のスマートフォン所持率も増加していく一方だと考えられる。今や、小学生もスマートフォンを持つ時代となった。SNSやゲームアプリなどの魅力が多いスマートフォンに時間を取られ、適切な時間の使い方が分からなくなっている小学生も一定数いるのではないだろうか。そこで私は小学校に「タイムマネジメント」という授業を導入することを考えた。

私の理数探究班では、インターネット上で小学生のスマートフォン所持率を調べた。

調べた結果、小学校低学年では20%弱、高学年では35%弱スマートフォンを持っていることが分かった。中学校に入学すれば、交友関係が広まるのはもちろん、スマートフォンを持っている人数も多くなる。LINEなどを用いた友人との会話も増えたり、Instagram、TikTokなどの娯楽アプリなどを使用する子供も増えたりと、携帯に時間を吸い取られてしまうことで、睡眠時間が削られ授業中に寝てしまうなどの勉強面へ悪影響を及ぼしてしまう可能性がある。そして、小学生という幼い頃から意識して生活することによって癖が付き、高校、大学の受験勉強や文武両道を実現することにも役立つのではないかと。よって、中学校に上がる前、つまり小学校の間に適切な時間の使い方を学ぶ必要性が高まってきていると考える。

また、少子高齢化が進む世の中では、現在の子供世代が社会人になったときの一人当たりの負担が大きくなると考えられている。社会に出たときの生産性を向上させるには、適切な時間の使い方を学んでおく必要があるはずだ。

このように、勉強に対する姿勢や将来の生産性を考えたときに、小学生のときから適切な時間の使い方を学び、身に着ける必要があるのではないかと。

以上の点から、私は小学校に「タイムマネジメント」という授業を導入することがよいと考える。

<授業実践3>「言語文化」読むこと

1 単元名

紀貫之の「女性仮託」について、作品の成立した背景を踏まえて論じる。

2 指導目標

(1) 単元の目標（下線部：関連する学習指導要領の指導事項）

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解することができる。（〔知識及び技能〕(2)のウ）

・作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めることができる。

（〔思考力・判断力・表現力等〕B「読むこと」(1)のエ）

・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。（「学びに向かう力、人間性等」）

(2) 言語活動

ア 言語活動

紀貫之の「女性仮託」について、複数の資料や作品の成立した背景を踏まえて論じる。

イ 言語活動のねらい

作品に関連した資料を読み比べることや、作品の成立した背景を踏まえて論じる活動を通して、紀貫之の「女性仮託」について、総合的に評価できるように導きたい。また、作者の執筆意図について複数の文章から読み取ったことを論じるだけではなく、「誰かに仮託して書く」という言語文化について、現代に通じるものがあることを感じ取らせたい。

(3) 教材

ア 教材 『土佐日記』『門出』『亡児』紀貫之（『高等学校言語文化』第一学習社）
『御堂関白記』

イ 教材観

『土佐日記』の中から「門出」「亡児」を取り上げる。いずれの文章も文章量が少なく、古文学習の導入期として自主的に読解をさせることに適している。『御堂関白記』については、当時の男性貴族の書いた「日記」と『土佐日記』を始まりとする「日記文学」との違いを比較することができる良教材であると考えた。記録としての日記とは異なる表現方法と、「女性仮託」をして書いた執筆意図を読み取らせるとともに、仮名で書かれた和文によって創られた新たな文学の価値についても理解させたい。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

生徒にとって魅力ある言語活動にするために、読み取った内容を「本の帯」として表現する活動を試みることとした。「読むこと」における論じる活動について、原稿用紙に書くのではなく、表現する設定を「本の帯」に変えることで生徒の個性が出る作品になることを目指した。相互評価についても、それぞれの書き上げた作品を楽しみながら読み合い、個々の読み取った内容を深め合う活気のある学びの場となることを企図した。

3 観点別学習状況の評価

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解している。	「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。	紀貫之の「女性仮託」について、作品に関連した資料を読み比べ、作品の成立した背景を踏まえて論じる活動を通して、他の意見を参考にしながら、積極的に内容の解釈を深め、思いや考えを広げて自らの学習を調整しようとしている。

(2) 評価方法

ア 知識・技能

ワークシートの記述によって評価する。

イ 思考・判断・表現（読むこと）

作品の記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
作者が女性仮託して『土佐日記』を書いた理由を、学習内容を踏まえて論じている。	本文の内容や【資料】の内容を適切に関連させながら、論じている。	本文の内容や【資料】の内容を踏まえて論じている。	紀貫之が、女性に仮託して『土佐日記』を書いた理由を書いている。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

振り返りプリントの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
相互評価を通して自身の作品の改善点を見いだして考えを深めている（α）。	他の生徒の意見や、他の生徒の作品の優れた点を生かして、自身の作品の改善点を積極的に見いだして考えを深めている。	他の生徒の意見を活かして、自身の作品の改善点を積極的に見いだして考えを深めている。	自身の作品の改善点を見いだしている。
単元を通して学んだことや身に付いたことを今後どのように生かしていくかを見いだしている（β）。	単元を通して学んだことや身に付いたことを今後どのように生かしていくか、言語文化の観点を基にして見いだしている。	単元を通して学んだことや身に付いたことを今後どのように生かしていくかを見いだしている。	単元を通して学んだことや身に付いたことを振り返っている。

※ α・βは、それぞれ「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」とする。

4 単元の指導計画（配当 4 時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点 *生徒への支援の手だて	評価上の留意点 ◇観点 □点検・確認 ■分析 *「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第1次 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 「門出」の読解。 本単元の目標を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを配付し、文法事項や現代語訳をペアで確認させる。 *文法事項で誤読している場合は、文法書を使うよう指示する。 ろう化表現や諧ぎやく表現が使われていることに気付かせる。 本単元のまとめとして、作者が「女性仮託」をした理由について各自の考えを論じる活動を行うことを確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇（知） □「記述の点検」（ワークシート） *できるだけペア同士でサポートさせ、教員は机間指導をして適宜助言を与える。
第2次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> 「亡児」の読解。 【資料1】【資料2】の読解。 作者が「女性仮託」をした理由について論じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを配付し、「亡児」や資料から読み取ることが出来る内容をペアで確認させる。 *ペアの助言を参考にさせる。 手順やルーブリックを確認させて書き方に留意させる。 *本時と前時で使用したワークシートを振り返らせる。 タブレット端末で作品を作成し、ロイロノート・スクール(株式会社 LoiLo、以下「ロイロノート」と表記)の提出箱に提出させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇（思） ■「記述の分析」（提出した作品） *次時の相互評価で他の生徒の作品を参考にさせる。
第3次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> 作品の相互評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りプリントを配付し、タブレット端末を使用しながら、4人グループで作品の相互評価をさせる。 *前時に示したルーブリックを基に相互評価させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇（態） ■「記述の分析」（振り返りプリント） *相互評価表に書かれたアドバイスを基に改善点を考えるように声を掛ける。

	<ul style="list-style-type: none"> ・作品の改善点を書く。 ・単元の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で代表作品を決めて、作品の優れた点を共有する。 ・相互評価を生かして自身の作品の改善点を考えさせる。 ・自身の作品を自己評価する。 ・全体の振り返りをして、活動を通して学んだことを確認させる。 	<p>*ワークシートや振り返りプリントを確認するように声を掛ける。</p>
--	---	---	---------------------------------------

5 本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

紀貫之の「女性仮託」について、資料を基に作品の成立した背景を踏まえて論じることができる。

(2) 本時の具体的な評価規準

紀貫之の「女性仮託」について、資料を基に作品の成立した背景を踏まえて論じている。

(3) 本時（3時／4時間）の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入 (5分)	・本時の学習内容を理解する。	①本時の目標と言語活動について確認する。	①作者が「女性仮託」をした理由について論じることが理解させる。
展開 ① (15分)	・「亡児」の読解。 ・【資料1】【資料2】の読解。	②本文中の歌について、共通して読み取ることができる心情をペアで確認する。 ③資料について、読み取ることができる内容をペアで確認する。	②亡くした子どもへの思いが歌に詠まれていることを気付かせる。 ③紀貫之の歌人としての業績や、当時の男性貴族が書いた日記の特徴に気付かせる。
展開 ② (25分)	・作者が「女性仮託」をした理由について論じる。	④これまでの学習内容を関連付けながら、本の帯を記入枠として考えを論じる。 タブレット端末で作品を作成し、ロイロノートの提出箱に提出する。	④書く手順やループリックを確認させて書き方に留意させる。 特に、本文の内容や【資料】を関連させながら、総合的に論じることができるように考えさせる。 ■書き上がった作品を「記述の分析」により評価する。
終結 (5分)	・本時の内容を振り返る。	⑤次時は生徒相互で作品を読み比べることを確認する。	⑤次時に向けて自身の作品を改めて読み、改善点はないか考えさせておく。

6 研究の実際と考察

(1) 言語活動 (第2次)

資料の読解については、初見の資料ではあったが、ペアで協力して必要な内容を読み取ることができていた。作品の作成については、設定した字数も少なかったためか下書きまでは時間内に余裕をもって書き上げる生徒が多かった。一方で提出先をロイロノートとしたが、タイピングに不慣れた生徒は完成に時間を要した。

(2) 相互評価 (第3次)

ロイロノートでグループ内の生徒の作品を見て相互評価を行った。他の生徒の作品の「改善点」を書く活動であったが、資料から読み取るべき内容について不足していた点を適切にアドバイスできていた生徒が多かった。ただし、評価規準からはずれた、「本の帯として魅力的なものにするため」のアドバイスも少なからず見られたため、「読むこと」の言語活動としての目標や、ルーブリックが全ての生徒に浸透していなかったことが反省される。

(3) 評価

評価については、研究協議会での助言を参考に「B評価」を要とした上で、「A評価」を突出したものにするべくルーブリックを練った。「思考・判断・表現」の観点の「A評価」については、複数の資料を読解し、適切に関連させて論じることを基準とした。「A評価」に達した作品は全体の一割程度であったが、「亡き子への思い・歌人としての事績・男性貴族の日記との違い・表現の特色」について、適切かつ、総合的に論じることができていた。「主体的に学習に取り組む態度」の観点については、二つの側面に分けて行うクロス評価を実践した。初めての実践であったが、評価のポイントが整理されて評価で悩むことが少なかった。「自らの学習を調整しようとする側面」の「A評価」については、言語文化に関する観点を踏まえた記述を求めた。「A評価」の作品は全体の二割程度で、「誰かに仮託して書く」ことや、「文学の虚構性」等、現代の言語文化に通じる内容について言及するものが見られた。

7 研究の成果と課題

作品に関連した資料を読み比べる上で、今回は授業者が資料を選び提示した。生徒の感想には、「読んだ資料以外にも、作者や作品に関係する資料は他にもないか気になったので探してみたい。」という内容が複数あった。時間や物理的な制約はあるが、図書室の利用や、インターネットでの検索などを通して適切な資料を自ら探すことによって、より主体的な言語活動が可能になるのではないかと考える。

今回の「本の帯」を作る活動を「書くこと」の領域としてアレンジを試みることも可能だと感じた。また、美術科や情報科とコラボレーションして「本の帯」だけではなく、「本の表紙」をトータルプロデュースするという教科横断的な学びも授業デザインとして可能ではないかと考える。

作品の制限字数を百字程度とした。実践前は、字数が少ないことにより、生徒が考えを表現する上で不都合かという懸念もあったが、生徒の取組の様子や、作品の出来具合を見ると適切な字数であったと思われる。字数がそれほど長くなかったことにより、一人の作品に対してゆとりをもって評価することができた。

振り返りプリントを見ると、「これからも自主的に作品の成立背景などを調べて、多角的に作品に向き合いたい」という旨の記述が多く見られた。生徒たちにとっては、「読み比べて論じる」活動は初めてのものであったが、よく考え、よく活動し、作者の執筆意図についての見方・考え方を深めることができた。今後も魅力的な言語活動を取り入れられるよう授業改善を行い、古典的文章や、日本の言語文化に対する学びに向かう力を育成していきたい。

<授業実践4>「論理国語」書くこと

1 単元名

適切な問いを立て、多面的・多角的な視点から自分の主張を組み立てよう。

2 指導目標

(1) 単元の目標

- ・情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使うことができる。〔知識及び技能〕(2)のイ)
- ・推論の仕方について理解を深め使うことができる。〔知識及び技能〕(2)のウ)
- ・実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕B「書くこと」(1)のア)
- ・多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり、根拠や論拠の吟味を重ねたりして、主張を明確にすることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕B「書くこと」(1)のエ)
- ・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。(学びに向かう力、人間性等)

(2) 言語活動

ア 言語活動

文章から問いを立て、対話型論証モデルを用いて意見を深化させる活動。

イ 言語活動のねらい

探究活動には問い立てが不可欠である。試行錯誤しながら問いを立てることで、論じるための適切な問いづくりについて考えさせたい。対話型論証モデルでは、自分の意見を論理的に精緻なものにするだけでなく、対立意見を考えさせることで、生徒が自分の意見を深めることを期待している。

(3) 教材

ア 教材 「科学・技術の歴史の中での社会」(『精選論理国語』数研出版)

イ 教材観

近現代では科学が社会とのつながりを強くしており、近年では国家の道具としての性格が強くなっている現状を伝える内容である。自分の身近なことと結び付けながら問いを立てたり、意見を述べたりするのに適切な教材である。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

問いを立てたり、書く内容を深化させたりするプロセスを視覚化することで、取り組みやすくした。また、対話型論証という明快で実践的な思考方法を身に付けさせることで、単に国語科の単元で実践するだけではなく、他の授業や総合的な探究の時間における探究活動でも、自ら活用していただけることも期待している。

3 観点別学習状況の評価

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使っている。 ・推論の仕方について理解を深め使っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「書くこと」において、実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めている。 ・「書くこと」において、多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり、根拠や論拠の吟味を重ねたりして、主張を明確にしている。 	テーマに沿って問いを立て、自らの主張を示す活動を通して、粘り強く問いを吟味したり、主張の根拠、理由付け、反論、反駁を吟味したりし、自分の考えを深め、主張を強めようとしている。

(2) 評価方法

ア 知識・技能

定期試験によって評価する。

イ 思考・判断・表現（書くこと）

- ・ワークシートの問いとその理由説明の記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
文章に関連した情報をさまざまな観点から収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めている。（問立て）	テーマについての問いを複数立て、それらの適切さを吟味した上で優先順位をつけることができる。	テーマについての問いを複数立て、理由を考えながら優先順位をつけることができる。	テーマについての問いを立てることができる。

- ・ワークシートの対話型論証モデルの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり、根拠や論拠の吟味を重ねたりして、主張を明確にしている。（対話型論証）	主張に対する適切な反論を複数考えるなどして自分の考えを多面的・多角的に見直し、根拠や理由付けを十分吟味しながら自らの意見を深化できている。	主張に対する反論を考えるなどして自分の考えを多面的・多角的に見直し、根拠や理由付けを示しながら自らの意見を深化できている。	自らの主張を考えることができる。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

ワークシートの問い立て、対話型論証モデルの記述及び、振り返りの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
ワークシートの問い立てにおける理由説明及び	次の二点をともに満たしている。	問い立てにおいて粘り強く理由を説明し、対話	問いを立て、対話型論証を実践しようとしている

び、対話型論証モデルにおける「根拠」「理由付け」に粘り強く取り組もうとしている(α)。	<ul style="list-style-type: none"> ・問い立てにおいて複数の具体的な理由を考え、粘り強く比較検討しながら問いを選ぼうとしている。 ・対話型論証において自分の主張、対立主張の両方で粘り強く複数の「根拠」「理由付け」を考えようとしている。 	型論証において粘り強く「根拠」「理由付け」を考えようとしている。	る。
自分の意見を深めようとしている(β)。	単元の目標を踏まえ、自らの意見を深めるために具体的に改善点を考えようとしている。	自らの意見を深めるために改善点を考えようとしている。	自らの意見を深めようとしている。

※ α・βは、それぞれ「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」とする。

4 単元の指導計画（配当6時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点 *生徒への支援の手だて	評価上の留意点 ◇観点 □点検・確認■分析 *「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第1次 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ・教科書本文を通読し、要旨をまとめる。 ・テキストに関連した問いを立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート①を配付し、問いを立てさせる。 ・問い立ての際、協働的問いのよさを理解させ、実践させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇(知)(思) □「行動の点検」(机間指導) *他の生徒の問い立てを参考に、視野を広げさせる。
第2次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・対話型論証モデルを理解する。 ・対話型論証モデルを実際に試し、実践できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート①を使いながら対話型論証モデルを体験させる。 ・「根拠」「理由付け」「主張」「反駁」の違いを理解させるとともに、対話型論証モデルの意義について理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇(知) □「行動の確認」(机間指導) *例を示し、解説をすることで理解を促す。
第3次	<ul style="list-style-type: none"> ・第1次で立てた問いを基に、対話型論証モデルを作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート②を配付し、1主張を考える、2根拠を集める、3理由付けを考える、4反論を考える、5反駁する、という流 	<ul style="list-style-type: none"> ◇(思) ■「記述の分析」(ワークシート②) *対話型論証モデルのどこが

(2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 相互評価をする。 相互評価を基にモデルを改善し、完成させる。 	<p>れでモデルを作成させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 論理的な飛躍に注意し、適切な反駁ができていないか確認させる。 	<p>理解できていないかを確認させ、ワークシートへのコメントでフィードバックする。</p>
第4次(1時間)	<ul style="list-style-type: none"> グループを形成し、成果を発表し合う。 グループの代表者を決め、全体で発表する。 振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 論理的な主張ができていないか確認させる。 一人の発表が終わるごとにポイントや改善した方がよい点をコメントさせる。 振り返りをして、活動を通して学んだ点を確認させる。 	<p>◇(態)</p> <p>□「行動の確認」(発表)</p> <p>■「記述の分析」(ワークシート②)</p> <p>*活動内容を振り返らせる。</p>

5 本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

根拠や理由付けを吟味しながら、主張を多面的・多角的に見直し、対話型論証モデルを作成できる。

(2) 本時の具体的な評価規準

根拠や理由付けを吟味しながら、主張を多面的・多角的に見直し、適切に対話型論証モデルを作成している。

(3) 本時(5時/6時間)の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入(5分)	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習内容を知る。 	<p>①本時の目標と言語活動について確認する。</p>	<p>①対話型論証モデルを完成させた上で、相互評価を行うことを伝える。</p>
展開(40分)	<ul style="list-style-type: none"> 「主張」「根拠」「理由付け」「反駁」の違いを理解する。 反論及び、その根拠や理由付けを考える。 想定した反論に反駁する。 評価の観点を基に相互評価する。 	<p>②ワークシート①を基に、前時の内容を確認する。</p> <p>③反論、その根拠・理由付け、反駁はワークシート②の対話型論証モデルに記入する。</p> <p>④他の生徒のワークシート②を見て回り、よいものに付箋を貼る。</p> <p>⑤多く付箋のついたものを発表するとともに、付箋を貼った生徒はよかった点を具体的に述べる。</p>	<p>②反論は複数の視点から考えさせる。また、恣意的にならないように注意させる。</p> <p>③反駁が論理的に正しく、妥当であるか確認させる。</p> <p>④表面的な考えではなく、学んだことを踏まえて付箋を貼らせる。</p> <p>⑤対話型論証モデルの完成によって、自分の主張の深まりを確認させる。</p> <p>■ワークシート②を基に、ルーブリックによって評価する。</p> <p>*対話型論証モデルのどこが</p>

			理解できていないかを確認させ、ワークシート②へのコメントでフィードバックする。
終結 (5分)	・本時の内容を振り返る。	⑥対話型論証モデルの意義を理解する。	⑥文章を書く前の段階が重要であることに気付かせる。

6 研究の実際と考察

(1) 問い立ての手法について

適切な問いを立てさせる際にダン・ロススタイン／ルース・サンタナ、吉田新一郎訳『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』（新評論、2015）を参考にした。本書では、協働的に問いを立てる手法が紹介されている。①問いの焦点を定める、②問いづくりのルールを確認する、③問いをつくる、④問いを書き直す、⑤問いに優先順位をつける、⑥問いに対する意見をまとめる・見直す、⑦振り返る、という流れである。本校では、1年次にこの手法を学んでいる。

(2) 対話型論証モデルについて

「対話型論証モデル」とは松下佳代氏によって考案された思考ツールである。問題から結論に至る縦軸と、自分の意見を対話によって深める横軸を視覚化し、思考のプロセスをモデル化している（図1）。意見を深めるだけでなく、視覚化することで自己評価・他者評価も容易になる。本単元の実施に当たって、松下佳代『対話型論証による学びのデザイン 学校で身につけてほしいたった一つのこと』（勁草書房、2021）、松下佳代／前田秀樹／田中孝平『対話型論証ですすめる探究ワーク』（勁草書房、2022）を参考にした。

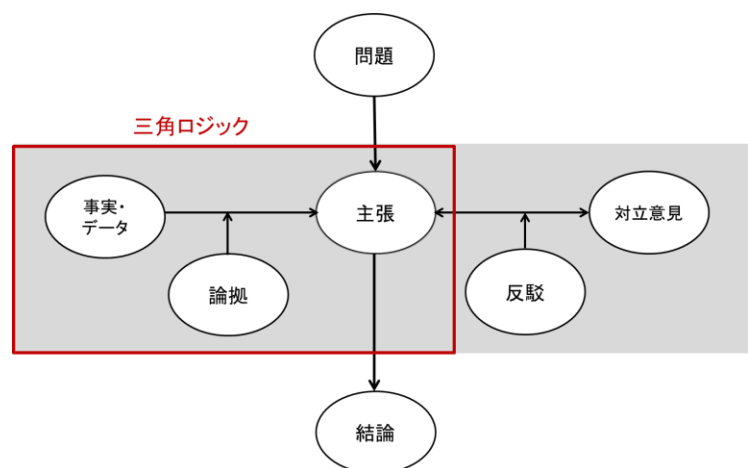
本単元では、「多角的」という点を踏まえて、反対意見を一つだけではなく、複数考えさせられるように改変した（ワークシート② p 7、8。これを「対話型論証モデル（改）」とする。）

(3) 問い立て

まず手法を確認させた。1年次に経験していたため手法の確認はスムーズに進んだ。昨年度と今回との違いは、根拠をもって問いを選ぶという点であることを確認させた。「見通しがあるか」「深掘りできるか」という観点で問いを選ぶことを指示し、簡単に練習させた（授業プリント p 2）。

次に教科書本文をテーマに問いを立てさせた。焦点化は①「科学者は社会的責任を負った」、②「科学は国家の道具となった」、③「その他」から選ばせた。10～15分程度の間に思いつく問いを挙げさせた後、問いのオープン・クローズドを反転させた。挙げた全ての問いの中から、「見通し」「深掘り」において優れたものを三つ選び（ここまでグループ）、さらに最終的な問いを一つに絞らせた（個人）。

〈生徒の様子〉



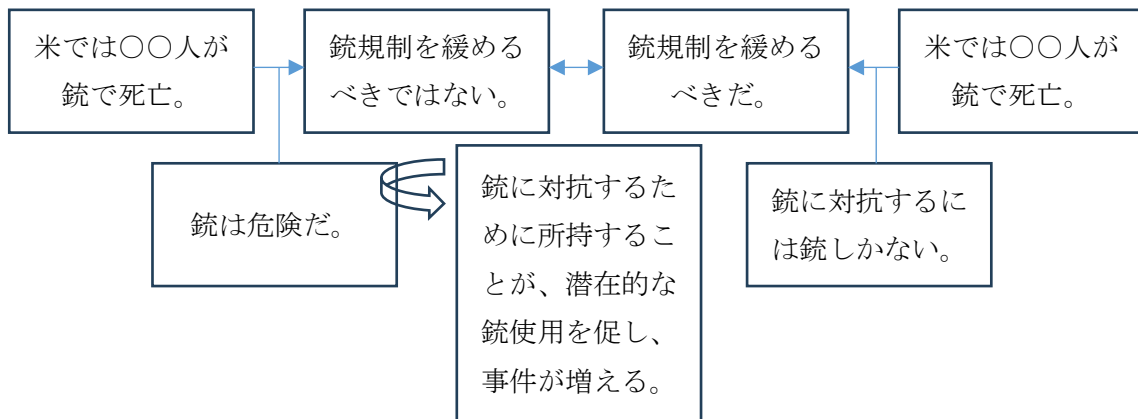
【図1 対話型論証モデル】

- ・グループによって活発さに違いはあったものの、全てのグループが8つ以上の問いを立てることができた。
- ・三つの問いを選ぶ際、教科書の情報を参考にしたり、タブレット等で調べたりして、「見通し」「深掘り」に合うか判断していた。
- ・最終的な問いを選ぶ段階では、半分ほどの生徒が、対話型論証モデルに应用することをイメージして選んでいた。(振り返りより)
- ・次の対話型論証モデルを作成するに当たって不都合が生じた場合は、問い直しをすることも可とした。

(4)対話型論証モデル(改)

三角ロジックは7月に学習済みである(本実践は10月)。

「日本では銃規制を緩めるべきか」というテーマで実際に対話型論証モデルを全体で作成した。次のモデルは黒板で作成したものの再現である。ただし、「問題」と「結論」は省略した。



【図2 対話型論証モデルの練習】

自分の立場の根拠や理由付けを十分考えて多面的に見ること、他の立場の意見を考えて多角的に見ることを念頭に置いて取り組ませた。

〈生徒の様子〉

生徒はまず選んだ問いに対する自分の立場を「主張」欄に書き、タブレットやスマートフォンで根拠を調べた。集めた情報に理由付けを行い、三角ロジックを完成させた。その後、反対主張を複数考えるという流れで活動した。6割ほど完成したところでグループ(問い立てと同じ)で状況を共有した。三角ロジックが正しいか、反対主張は適切かを助言し合った。

- ・ほとんどの生徒が自分の立場を三角ロジックで考えることができていた。
- ・自分の立場の根拠が一つしかない生徒が2割ほどいた。
- ・主張を「はい/いいえ」の2択で考えた生徒も2割ほどいて、根拠の違いを立場の違いとしていた。
- ・反駁では反対主張を否定するだけでなく、自分の立場の優位性を主張できているものもあったが、少数だった。

(5)評価

〈問い立て〉

A…テーマについて問いを複数立て、それらの適切さを吟味した上で優先順位をつけることができている。(ループリックより)

→最終的な問いを選んだ理由や迷った点を書かせその内容を評価した。「適切さ」については、「見通し」「深掘り」について吟味した内容が記述してあり、かつそれが具体的であることとした。判断に迷った場合はグループで選んだ三つの問いの理由欄を参考にした。

【問いを選んだ理由の例】（ワークシート② p 6）

①	<p>問い—科学は国家の道具になるべきか</p> <p>理由—この問いは金銭面や戦争などの被害面、科学の発展面などさまざまな面から見る事ができる。また、感情論にもなり得たり、現実的な議論もでき得たりする。科学が国に及ぼした影響の歴史も調べやすそう。</p>
評価	<p>金銭面、被害面、発展面、感情論、現実的な議論など深掘りについて具体的に述べている。また、影響の歴史などの調べやすさについて述べている。A評価とした。</p>
②	<p>問い—社会的責任と自由な研究を両立するにはどうすればよいか。</p> <p>理由—科学のあり方について最も深掘りできると考えた。科学の発展や国家と科学との関係など議論を深めていける。また、実用性もあると感じた。</p>
評価	<p>深掘りについては言及しているものの、探究の見通しについては触れられていない。B評価とした。</p>

〈内容の深化〉（対話型論証モデル（改））

A評価…主張に対する適切な反論を複数考えるなどして自分の考えを多面的・多角的に見直し、根拠や理由付けを十分吟味しながら自らの主張を深化できている（ループリックより）。

→自分の立場の三角ロジックが適切であること、かつ複数の反対主張を考えた上でそれらに適切に反駁していることという観点で評価した。

【問いを選んだ理由の例】（ワークシート② p 7, 8）

③ (図3)	<p>複数の根拠を挙げ、適切に理由付けをしている。反駁において反対の主張を否定するだけでなく、自らの意見の正当性を主張できている。対話型論証を通して十分意見を深化できていると言える。A評価とした。</p>
-----------	--

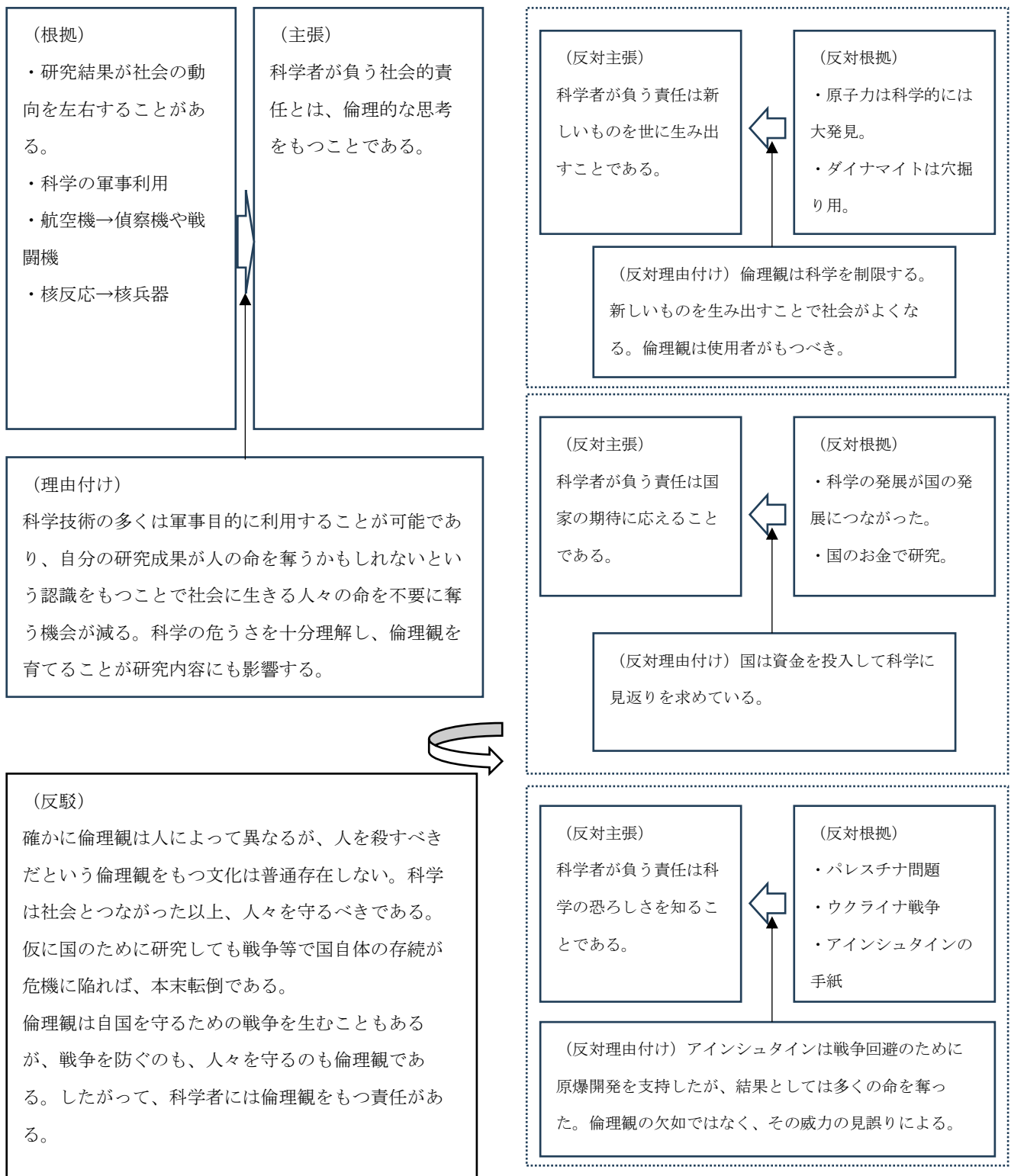
7 研究の成果と課題

〈問い立て〉

- ・1年次で経験済みであったためスムーズに進んだが、初めて実施する場合は、これを1単元とすべきである。問い立ての手法は問いを立てることが目的ではなく、物事に疑問をもち、視点を変えながら新しい気付きを得ることが重要であるため、1単元とする場合は、その点にも理解を促したい。
- ・問いの焦点化を行った結果、多くの生徒が「国家の科学使用」「科学者の責任」という問いを最終的に選んでしまった。焦点化した結果、問題を明確にはできたものの、視野を狭めることになってしまった。本校の生徒であれば、「科学と社会」や「科学は世界にあふれている」など広い焦点化でもよかったと思われる。

〈対話型論証モデル（改）〉

- ・最大の欠点は、改変したことによって、縦軸が失われたことである。反駁で単に反対主張を否定するだけの生徒が多くいて、その後の意見の深まりが成果として視覚化されていなかった。本物の対話型論証をまずは使用していきたい。



【図3 成果物③問い：「科学者が負う責任は倫理的思考をもつことか」】

- ・ 反対主張を複数挙げるのは生徒には難しい様子だった。複数の立場を考えるにはよい問いが不可欠であり、それに気付けた生徒は問い直しをしていたが、多くの生徒がそのままの問いで進んでいた。また、複数の立場を考えることで、それぞれの情報量が薄くなり、反駁も単純なものになってしまった。十分な時間が確保できなかったことを考えると、欲張らず自分の主張⇔反対主張だけのシンプルなものにすべきだった。まずは本物の対話型論証モデルを使用したい。
- ・ その一方で、複数の立場を考えることができ、自分の意見を深めることができた生徒もいるため、発展的な形として今回の手法を応用していけるとよいと感じた。

- ・成果物を分析する際、見る視点がばらつくため、チェックしづらかった。また、記述量が多く、文章を書かせたものを読むよりもかえって読むのに時間がかかってしまった。縦軸を意識し、「結論」まで書かせるべきである。
- ・反駁が適切かどうか判断するのに、全ての反対主張のロジックを理解する必要があり大変だった。
- ・単に「譲歩」をするだけではなく、反対意見を吟味し深めた上で反駁する今回の活動は探究学習にも応用できると感じている。

<授業実践5>「論理国語」読むこと

1 単元名

ChatGPT が生成した要約文を基にして、文章の内容や構成を的確に捉えよう。

2 指導目標

(1) 単元の目標

- ・論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。([知識及び技能] (1)のイ)
- ・文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めることができる。([知識及び技能] (1)のウ)
- ・文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしながら要旨を把握することができる。([思考力、判断力、表現力等] B「読むこと」(1)のア)
- ・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。(学びに向かう力、人間性等)

(2) 言語活動

ア 言語活動

ChatGPT が生成した文章の要約文を基にして、文章の内容や構成を的確に捉える活動。

イ 言語活動のねらい

ChatGPT を用いて生成した要約文は、不自然な表現が散見する。さらに、それらしい内容ではあるが、要旨を捉え切れていない場合がある。特に、筆者が論証するために通常とは異なる特定の意味で用いる語句の意味を読み外している ChatGPT は要約文の手がかりとして有効である。だが、生成文に誤りがある。そのことに留意して内容や構成を的確に捉える方法を習得させたい。

(3) 教材

ア 教材 せちやまかく 瀬地山 角 「女性／男性だから〇〇」(『新 論理国語』三省堂)

イ 教材観

性役割分業について考える評論である。通常とは異なる特定の意味で用いている語句や、読解の鍵となる語句を理解することが、本文の要約に必要なことが分かる教材である。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

2023 年は多種多様な生成 AI が活用され始めた。ChatGPT はその顔と言える。そこで、ChatGPT との対話を生徒に見せることで、言語活動に興味をもたせた。簡単な指示文を出せば、まるで大学教授と話しているように的確な答えが返ってくる。回答の精度は、それまでの BoT とは一線を画す。しかし、生成 AI の回答は限界がある。ChatGPT の生成した要約文について、グループで話し合っ修正点の気付きを得られるようにした。その気付きを基にして、文章の内容や構成を的確に捉えることができるよう心がけた。

3 観点別学習状況の評価

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・ 論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増やし、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。 ・ 文や文章の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解している。 	<p>「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしながら要旨を把握している。</p>	<p>ChatGPT が生成した文章の要約文を基に、文章の内容や構成を的確に捉える活動を通して、粘り強く、学習課題に沿って、論理の展開や要旨を把握しようとしている。</p>

(2) 評価方法

ア 知識・技能

ワークシートの記述によって評価する。

イ 思考・判断・表現（読むこと）

ワークシートの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
通常とは異なる特定の意味で用いている語句を理解し、文章の内容や構成を的確に捉えて要約文を書いている。	要約文について ChatGPT の誤りを正確に訂正しつつ、文章の内容や構成を的確に捉え、要旨を把握して書いている。その上で ChatGPT の提示する要約文にとらわれることなく、より正確に内容や構成を捉え、論点を明確にして要約文を書いている。	要約文について ChatGPT の誤りを正確に訂正しつつ、文章の内容や構成を的確に捉え、要旨を把握して書いている。	要約文を書いている。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

要約文の記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
ChatGPT が生成した文章の要約文と自分の要約文を読み比べる活動を通して、粘り強く、学習課題に沿って、文章の内容や構成を的確に捉えようとしている。	要約文について、ペアで行った推敲を基にして内容や構成を的確に捉えて書こうとしている。その上で、相互評価表を参考にして、改めて本文の要旨を捉え、論点を明確にしようとしている。	要約文について、ペアで行った推敲を基にして内容や構成を的確に捉え、要旨を把握しようとしている。	要約文について、ペアで行った推敲を基にしようとしている。

4 単元の指導計画（配当時間3時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点 *生徒への支援の手だて	◇観点□点検・確認■分析 *「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて

<p>第1次 (1時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 「女性／男性だから○」を授業者が範読する。 授業スライドを用いて、筆者の指摘する「自由」や「異質平等論」について、まとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 読みながら、難解な語句や表現に印を付けさせ、適宜説明をする。 通常とは異なる特定の意味で用いている語句ということを理解する。 *接続詞や指示語に注目させる。 ペアを作り、代表者がワークシートIを提出する。 *本文中にある事例やグラフなどを手がかりにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇ (知) □ 「記述の点検」(ノート) *読めない漢字や意味が分からない語句をチェックさせ、辞書で調べさせたり、解説したりする。 ◇ (知) □ 「記述の確認」(ノート) *「この場合の」という言葉に注目させる。 ◇ (思) □ 「記述の確認」(ロイロノート・スクール(株式会社LoiLo、以下「ロイロノート」と表記)のワークシートI) *ペアの助言をもらいながらロイロノートの提出箱に提出する。
<p>第2次 (1時間) 本時</p>	<ul style="list-style-type: none"> ChatGPT が生成した要約文を各自で通読する。 ペアで、ChatGPT の誤っている部分を確認する。 要約文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 文法的なミスや、内容の誤りがあることを説明する。 ペアでどこが間違っていて、どう直せばよいか確認する。 *通常とは異なる特定の意味で用いている語句を、正確に説明できるように指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇ (思) □ 「記述の確認」(ロイロノートのワークシートII) *ペアの助言をもらいながらワークシートを完成させる。 ◇ (思) (態) ■ 「記述の分析」(ロイロノートのワークシートIII) *再度説明をしたり、詳細なコメントを書いたりする。
<p>第3次 (1時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 生徒相互で要約文を読み合う。 相互評価表を用い互いの要約文を確認する。推敲し、再度要約文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 通常とは異なる特定の意味で用いている語句が的確に説明しているかどうか注目させる。 相互評価表などを基に再考させ、粘り強く取り組ませる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇ (態) ■ 「記述の分析」(要約文) *相互評価表から、推敲するポイントを見つけることができるように声を掛ける。

5 本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

通常とは異なる特定の意味で用いている語句を理解し、文章の内容や構成を的確に捉えて要約文を書くことができる。

(2) 本時の具体的な評価規準

通常とは異なる特定の意味で用いている語句を理解し、文章の内容や構成を的確に捉えて要約文を書いている。

(3) 本時（全3時間中の2時間目）の指導

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入 (5分)	・ 本時の学習内容を知る。	①単元の目標と言語活動について確認する。	①ChatGPT の生成文に誤りがあることを説明する。
展開 (40分)	・ ペアで ChatGPT の誤っている部分を確認する。 ・ 要約文を書く。	②間違っているところを指摘し、どう直すかを書く。 ③ペアで行った修正を基に、要約文を書く。	②指示語を手がかりにして、本文の内容と照らし合わせる。ロイロノートのワークシートⅡを使用する。 ③ ・ 通常とは異なる特定の意味で用いている語句を的確に説明するように指導する。 ・ 要約のやり方(要点を捉えて接続詞を的確に使用する)を指導する。 ・ ChatGPT に指示した、「性的指向」「性別からの自由」「異質平等論」の三つの言葉を用いて二百字程度で要約する条件で行う。 ・ ペアで行った修正を基に、粘り強く取り組ませる。
終結 (5分)	・ 本時の内容を振り返る。 ・ 次時の内容を知る。	④作った要約文を、改めて読む。生徒相互で要約文を読むことを確認する。	④本時の目標に即した活動ができたか、またその達成度について振り返る。要約文を回収し、ルーブリックを用いて「記述の分析」により評価する。

6 研究の実際と考察

(1) ChatGPT のバージョン

使用したのは GPT-3.5、つまり無料版である。有料版の GPT-4 で同じ活動をした場合、生成される答えは違うはずだ。GPT-3.5 より的確で、最新の情報を含み、質問者の意図にあった回答になると予想できる。しかし、この時点では県から予算が下りておらず無料版を使用した。

(2) 生徒の反応

授業の始めに、「ChatGPT を使ったことがあるか。」という質問を教室で投げかけた。挙手をしたのは 2、3 人程度であった(令和 5 年 9 月下旬時点)。本校は令和 5 年 7 月中旬に、生成 AI を使用する際の

注意事項を生徒に伝えるとともに、保護者からの承諾を得た。つまり、9月の時点でChatGPTの周知はできていたはずである。しかし、知っていても使うまでの心理的なハードルはあったのだろう。使ったことがない生徒が大半だということを知り、まずはChatGPTと対話する様子を見せた。スクリーンに画面を映し出し、教員がChatGPTに人間関係に関する悩みを投げかけた。即時に、ある程度参考になりそうな答えを出してくる生成AIを見て、生徒の目が輝いたのが分かった。

次に本題である教科書の要約文を見せた。下に、そのChatGPT要約文を載せる。「性的指向」「性別からの自由」「異質平等論」の三つの言葉を用いて200字程度で要約せよ、という指示文を書いた。

ChatGPTからの回答は次の通りであった。

この文章では、性役割分業についての議論が性差別と結びつく問題であると指摘されています。性別からの自由と性的指向の認識が重要であり、男女の平等は単に平等だけでなく、性別からの自由も含むべきだと主張されています。また、異質平等論についても触れられ、これが性別に固定的な役割を強制する可能性があるとして指摘されています。性別に基づく能力や役割は個人によって異なるため、性別からの自由が尊重されるべきだとの立場が述べられています。この自由を尊重することで、男女平等がより意味のあるものになり、性別に関わらず個人の能力が発揮される社会を実現するための一歩とされています。

最初は「どこが間違っているか分からない」と言っていた生徒たちだが、ペアを組んでじっくり修正をすると段々と「粗(あら)」を見つけていった。以下に、生徒が見出した修正ポイントを挙げる。

(3) 修正ポイントを明確にする

ロイロノートにあるシンキングツールの一つ「フィッシュボーン」を使用した。①語句の使い方、②文法、③文の構成、④気付いたこと・感想・メモと四つのポイントで修正を行った。語句の使い方とは、ChatGPTに指示した、「性的指向」「性別からの自由」「異質平等論」の語句の使い方である。②文法とは、生成AIならではの不自然な日本語を指す。③文の構成とは、全体的な文章の書き方についてである。この説明を生徒に行ったことで、修正のポイントが見えてきたと考えられる。修正ポイントを明確にせず「間違っているところを見つけてみよう」と指示したとする。生徒からすると「何となくおかしい気がするけど、どこが間違っているか分からない」と思ってしまうだろう。

生徒が指摘したのは大きく三つである。まず大きな問題点は、結局何が言いたいのか分からないということだ。つまり、筆者の主張が理解しがたいという点である。ChatGPT要約文では、情報の重み付けがされておらず、箇条書きを単純に文章化した感が否めない。次に、語句の説明がされていないということだ。特に「異質平等論」は、辞書に意味が記載されていない言葉であり、本文でどのような意味で用いられているのか説明を要する。「性的指向」においても同様だ。近年LGBTQという言葉が使われ、性の多様化が認められようとしている。このような背景を語句の説明に組み込む必要がある。最後に、他人行儀な書き方をしている点だ。「～されています」という文末表現が4回も出てくる。「人間味がない」とコメントするものもあった。実際の修正シート(ワークシートII)は参考資料1を参照。

(4) 要約文を書く活動について

ChatGPT要約文を参考にして要約文を書いた。ほとんどの生徒が、生成AIの要約文について欠点を見つけることができていた。しかし、実際に要約文を書くという活動は違った難しさがあるようだ。修正シートと本文をにらめっこしながら、要約文を作る活動に苦心していた。そこで活動の最中に机間巡視を行い、できるだけ多くの生徒と対話をした。「異質平等論」についてよく理解できていない生徒に

は、前次の授業でまとめたことを振り返るように促した。「性的指向」については「LGBTQ」といった具体例を出せるように提案した。そして最大の問題である、作者の主張を明確にできていない点を解消するためにどうしたらよいのか、共に考えた。「この文章で筆者が言いたいことを一言で表すと何だろうか」と生徒に質問したとする。それに対して生徒は「性別によって差別されることはいけない」と答えることができる。「その主張を明確に言えるようにしましょう。文の書き出しとかは ChatGPT を参考に書いていけばよい」とアドバイスを送った。対話を行った後は、要約文を書くのに苦労していた生徒たちも ChatGPT 要約文というたたき台を基にして書けていた。

ChatGPT 要約文を先に見せたことで、逆に要約しにくくなっているのではと感じた。そこである生徒に「ChatGPT の要約文があると、要約の邪魔になる？」と尋ねた。その生徒は「邪魔にはならない。むしろあった方がよい。要約を書く手がかりになるから」と言っていた。別の生徒も「ゼロから要約するのはしんどい。ChatGPT 要約文があると助かる」と同様のことを言っていた。今後の言語活動において、心理的にハードルが高いゼロから一を生むという部分を、生成 AI に任せればよいのではないか、という展望をもった。

ループリックの B 基準のポイントは「ChatGPT の誤りを正確に訂正しつつ、文章の内容や構成を的確に捉え、要旨を把握して書いている」ことだ。下に、B 評価作品の例を載せる。

「男は仕事・女は家庭」といった、個人の能力とは関係なく、男性・女性という性別を理由として役割を分ける意識をもっていることという性役割分業についての議論が性差別と結び付く問題である。性別からの自由と性的指向の認識が重要であり、男女の平等は単に平等だけでなく、性別からの自由は、LGBTQ なども含むべきだと考える。また、「男と女は違うけれど平等だあるいは「男女は違った役割を担っていても対等である」という考え方である異質平等論が性別に固定的な強制をする可能性がある」と主張している。

性別に基づく能力や立場は人によって異なるため性別からの自由が尊重されるべきだとの立場で筆者は述べている。

※下線は指導者が引いた

「異質平等論」について「男女は違った役割を担っていても対等である」と語句の説明をした上で、「性別に固定的な強制をする可能性がある」と指摘している。また「性的指向」については、LGBTQ という具体例を出して語句の説明をしようとしている。文末表現も工夫が見られる。そして筆者の主張について、「性別に基づく能力や立場は人によって異なるため性別からの自由が尊重されるべきだ」と説明している。ChatGPT の要約文を改善しつつ、本文の内容や構成を的確に捉え、要旨の把握をしようとしている。一方で、文章が冗長になっている。今回の指導事項は「読むこと」(1)ア(構造と内容の把握)であり、評価の対象ではない。しかし、ChatGPT 要約文に引っぱられた結果、本文を正確に読み取ることができていない。具体的には「性的指向」の説明が不十分である。また「性別からの自由」とは何なのか、語句の説明ができていない。

ループリック A 基準のポイントは「ChatGPT の提示する要約文にとらわれることなく、より正確な内容や構成」を読み取って論点を明確にしていることだ ChatGPT の文章の書き出しは「(この文章では、)性役割分業についての議論が性差別と結び付く…」となっている。ここにとらわれずに、より正確な読解をしていることが分かる A 評価作品例を載せる。

女、男など個人が変えることのできない属性で差別することはいけないことだ。今は体の性別だけでなく、心の性別、つまり性的指向も「属性」の対象に含まれ始めている。

男女の平等は、性別に関わりなく能力を発揮できる性別からの自由という概念が不可欠である。また、女と男は違うけど平等という考えの異質平等論は、性別からの自由がなく、性役割を固定してしまう。能力は性別によってではなく、個人で異なるため、性別からの自由は尊重すべきだ。

※下線は指導者が引いた

「性的指向」を理解するためには、「属性(女、男など個人が変えることのできないもの)」を捉える必要がある。その「属性」には、身体の性だけではなく心の性別、つまり「性的指向」も含まれる。さらに、「性別からの自由」の説明として「性別に関わりなく能力を発揮できる」と説明しており、正確に読み取れていることが分かる。「能力は性別によってではなく、個人で異なるため、性別からの自由は尊重すべき」という論点が明確になっている。より正確な読解ができていると判断してA評価とした。

7 研究の成果と課題

ChatGPT を要約に使うのは有効な手段である。要約をさせた後は、情報の重み付けを人間の手で行う必要がある。今回の場合は ChatGPT 要約文では筆者の主張がぼやけるということが分かった。また ChatGPT は通常とは異なる特定の意味で用いている語句を正確に読み取ることができない ChatGPT 要約文はたたき台として認識するべきである。これらの点を留意すれば、生成AIは、文章の内容と構成の的確な理解をする助けになるはずだ。

この単元では、前もって教員によるお膳立てをした。お膳立てとは読解の手がかりとなるキーワードを教員が挙げて指示文を書いたことだ。(『性的指向』『性別からの自由』『異質平等論』の三つの言葉を用いて200字程度で要約せよ」という指示文) この「キーワードを挙げる」という最初の一步を、生徒が(または ChatGPT が)やってもよいのではないか。ChatGPT の活用法について課題が残った。

令和5年度は生成AI元年と呼ばれるだろう。今回は要約をするだけに留まったが、今後も研究を重ねて、言語活動を行う際の効果的な使用方法を探る。

<授業実践6>「文学国語」書くこと

1 単元名

随筆を読んで優れた表現や叙述の仕方を理解し、感性や心情を豊かにする。

2 指導目標

(1) 単元の目標

・文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深めることができる。(〔知識及び技能〕(1)ウ)

・文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫することができる。(〔思考力、判断力、表現力等〕A「書くこと」(1)ウ)

・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。(「学びに向かう力、人間性等」)

(2) 言語活動

ア 言語活動

自由に発想したり教材の随筆を参考にしたりして、エッセイを創作する。(2)ア参照)

イ 言語活動のねらい

小学生や中学生の頃に読んだ本を再読し、感じ方や捉え方がどのように変わったのかをグループで話し合わせ、過去に読んだときとは違う感じ方や他者と読み方が違うところなどをエッセイとして表現する。再読やグループでの話し合いなどの体験を通して感じたことを基にした上で、表現方法を工夫し魅力的な文章になるよう心がけさせたい。

(3) 教材

ア 教材 「クレールという女」須賀敦子(『文学国語』東京書籍)

イ 教材観

本教材は、筆者が40年前に読んだ『人間のしるし』(クロード・モルガン)を再び読み直し、本の登場人物の人生と筆者の人生を重ね合わせながら、叙情的に描いた随筆である。書物の中の登場人物のそれぞれの生き方や考え方を読み解き40年前と現在とで感じ方や捉え方が変化したことが巧みに表現されている。生徒たちにも過去に読んだ作品を再読する機会を与え、時間の経緯の中で読みが変化することを感じさせるのに適した教材である。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

いわゆる「読書感想文」が苦手な生徒は多い。書くことへの抵抗感をなくすために、過去に読んだ本をもう一度読み直して変化に気付かせたり、グループで互いの感想を話し合ったりと、書くための材料を自ら発見できるように進めていった。過去に読んだときの感想がすぐに思い出せなくても、印象に残っている登場人物の台詞は思い出せたり、話し合いの中でグループの仲間の意見に触発されたりしていくうちに、意欲的に課題に取り組めるよう工夫した。

3 観点別学習状況の評価

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
文学的な文章やそれに関する	「書くこと」において、文体の特	エッセイを創作することを通し

文章の種類や特徴などについて理解を深めている。	徴や修辞の働きなどを考慮して、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫している。	て、文体の特徴や修辞の働きなど、表現を粘り強く工夫する中で、自らの学習を調整しようとしている。
-------------------------	--	---

(2) 評価方法

ア 知識・技能

ワークシートの記述によって評価する。

イ 思考・判断・表現（書くこと）

ワークシートとエッセイの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
様式に従い、再読によって得た感じ方や捉え方の違いを踏まえ、文体や修辞などの工夫をしながら、エッセイを書く。	過去の読みと現在の読み、あるいは他者の読みと自分の読みを比較した上で、魅力的な文体や修辞などを考慮し、読み手を引き付ける表現を用いて、エッセイを書いている。	過去の読みと現在の読み、あるいは他者の読みと自分の読みを比較した上で、文体や修辞などを考慮し、読み手を引き付ける工夫をしながら、エッセイを書いている。	過去の読みと現在の読み、あるいは他者の読みと自分の読みを比較して、エッセイを書いている。

4 単元の指導計画（配当4時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点 *生徒への支援の手立て	評価上の留意点 ◇観点 □点検・確認 ■分析 *「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第1次（2時間）	<ul style="list-style-type: none"> 単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 過去に読んだ書物で現在も印象に残っているものを挙げ、その理由を考える。 「クレールという女」を各自で通読し、本文の構成を整理し、その特徴を理解する。 『人間のしるし』の登場 	<ul style="list-style-type: none"> 教材の随筆を読む中で、魅力的な表現に着目し、エッセイ創作に役立てることを理解する。 小学校や中学校に読んだ本で印象深い本を自由に挙げさせ。特徴的な登場人物や台詞など、印象に残っている理由を考えさせる。 書物の登場人物の関係性を理解しながら、作者がどのように表現しているかに注目させる。 *書物の内容を綴る中で、現実世界の風景描写や作者の懐古的描写がどのような効果を生み出しているかを考えさせる。 『人間のしるし』が筆者たちを 	<ul style="list-style-type: none"> ◇（知） □「記述の点検」（ノート、ロイロノート・スクール(株式会社LoiLo、以下ロイロノートと表記) *随想というジャンルの文章がどのようなものかを理解させる。 ◇（知）

	<p>人物のそれぞれの生き方・考え方をワークシートを使ってまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・四十年前、筆者たちは『人間のしるし』を通して自分たちの生き方をどのように考えていたかを読み取り、ワークシート I に記入する。 	<p>とりこにした理由を読み取らせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・四十年前の筆者たちが「人間らしく生きる」とはどのようなことだと考えていたかを考えさせる。 ＊四十年前の筆者たちが、自分たちの問題意識をどう捉えていたかを確認させる。 	<p>□「記述の確認」(ワークシート I)</p> <ul style="list-style-type: none"> ＊「四十年前の私たち」と現在の「私」とでは、登場人物に対する考え方が変わっていることに気付かせる。 ＊「私」と「仲間」たち、それぞれの視点から登場人物について確認させる。 ＊他の生徒と相談させながら、ワークシート I を完成させる。
第2次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・四十年後の筆者が『人間のしるし』から何を感じているかを読み取る。 ・小学校や中学校に読んだ教材を再読し、感じ方や捉え方がどのように変わったのかをグループで話し合う。 ・当時と現在の読みの違いをワークシート II に整理し記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・四十年後の筆者が登場人物の生き方をどう捉え直したかを確認させる。 ＊四十年後の筆者が『人間のしるし』を読んで、登場人物に対する見方が変化していることに注目させる。 ・準備した複数の教材をグループ内で通読し、当時と現在の感じ方や捉え方の違いを自由に話し合わせる。 ＊作品を読んだ印象ばかりに偏らず、経験や価値観の変化に伴い、新たな気付きがあるかを話し合うように注意する。 	<p>◇(思)</p> <p>□「記述の確認」(ワークシート II)</p> <ul style="list-style-type: none"> ＊グループ内の他の生徒と相談させながら、ワークシート II を完成させる。 ＊回収したワークシート II の記述が不十分なものについては、再度説明したり、詳細なコメントを書いたりする。
第3次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の読書体験に基づいて本文に倣い、エッセイを書く。 ・必要に応じて他の生徒に読んでもらい、表現の仕方を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・過去の読みと現在の読みの違いを明確にさせ、それが伝わるように表現方法を工夫する。 ＊完成した者は、自分が感じたことが伝わる文章かどうかを見直すよう指示する。 	<p>◇(思)</p> <p>◇(態)</p> <p>■「記述の分析」(随筆)</p> <ul style="list-style-type: none"> ＊新たな気付きが見つからない場合は、より強く印象に残った部分について書くよう指導する。

5 本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

教材を踏まえ、過去に読んだ作品を読み直すことによって、感想や考え方が変化していることに気づき、随筆を書くことができる。

(2) 本時の具体的な評価規準

様式に従い、過去の読みと現在の読みを比較しながら、文体や修辞などが工夫されて書かれている。

(3) 本時（4時／4時間）の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入 (5分)	・ 本時の学習内容を知る。	①本時の目標と言語活動について確認する。	①過去の教材を再読して感じ方や捉え方の変化を随筆として書くことを理解する。
展開 (40分)	・ 自分の読書体験に基づいてエッセイを書く。	②「過去の読み」と「現在の読み」を比較し、違いが分かるように書く。 ③読み手を引きつける文章になるよう、表現方法を工夫する。 ④必要に応じて他の生徒に読んでもらい推敲する。	②ワークシートⅡを活用し、過去と現在の感じ方や捉え方がどのように変わったかを確認させる。 ③読み手に分かりやすく伝えるだけでなく、魅力的な表現になるよう意識させる。 ④他者の助言を踏まえ、自分の文章の特徴や課題を見つけさせる。
終結 (5分)	・ 本時の内容を振り返る。 ・ 次時の内容を知る。	⑤自分が工夫した表現にはアンダーラインを引く。 ⑥リフレクションカードを記入する。	⑤文体や修辞など、書く際に工夫した部分に線を引くことで意識させる。 ⑥本時の目標に即した活動ができたか、またその達成度について、振り返ってロイロノートに入力させる。 ■随筆を回収し、ループリックを用いて「記述の分析」により評価する。

6 研究の実際と考察

(1) グループワーク

再読する作品を小学校、中学校の教科書で読んだものとし、事前の授業で生徒にどの作品をもう一度読んでみたいかを尋ねた。意見の多かった作品を中心に、以下のものを準備した。

- ・「ちいちゃんのかげおくり」あまんきみこ（小3）
- ・「やまなし」宮沢賢治（小6）
- ・「少年の日の思い出」ヘルマンヘッセ（中1）
- ・「盆土産」三浦哲郎（中2）
- ・「握手」井上ひさし（中3）

5～6人一組とし、各グループに5作品を入れた封筒を配付した。回し読みを指せた上で、どの作品について話し合うかを選ぶよう指示した。すぐに決まらないグループについては、複数の作品で話し合ってもよいことにした。また、選んだ作品によっては別のグループとのメンバーの入れ替えも可とした。話し合いを進めていく上では、過去に読んだときの感想や印象をなかなか思い出せない、話せない者もいた。そのため、もういちど読んでみたいと思った理由を糸口に、登場人物の印象深い台

詞や当時の授業のこと、また共感したり、似たようなことを経験したりしなかったかなど、話し合いを進める上でのポイントを補足説明した。クラスによっては外国籍の生徒が在籍し、中学生時代にどの作品も読んでいない者もいたが、その場合は自分と他人との感想の違いを書くよう指示した。始めは意見の言えなかった生徒も、他のメンバーの意見に触発される形で意見が述べられるような姿も見られた。どのグループも活発な活動が行われ、順調に進めることができた。

(2) エッセイ創作

教材に倣って、書き出し文、転換文、結末文の書式を設定し、その形に添ってエッセイを書くように指示した。多くの生徒は、エッセイはもちろん自由に意見や感想を書くことを苦手とする者が多いため、今回のように書式をあらかじめ設定しておいたのは、有効であった。また、自分一人ではなかなか書くことが見いだせなかったり、意見がまとまらなかったりすることについても、グループワークを通して、他人の意見を引用する形で文章を書き進めることができているように感じる。エッセイを書く時間も、生徒の要望が多かったのでグループでの座席のままとし、お互いに意見を交換したり、見せ合ったりしながら作業を進めていった。作品のあらすじは最小限とし、自分や他の意見を参考にしながら書くようにも指示した。50分の授業内で提出できた者は約7割であったため、未完成の者は期日を設けて提出するように促した。提出については、手書きでも文書作成ソフトを活用したものでも可能としたが、9割以上の生徒が手書きで作品を完成させて提出した。

7 研究の成果と課題

過去に読んだ作品をもう一度読み直すという活動は、作品自体の感想だけでなく、読んだ当時の生活も同時に思い起こされ、グループでの話し合いは予想した以上にどのグループも盛り上がった。話し合いの中で、懐かしさと新鮮さの二つを感じることができ、エッセイの創作意欲へのつなげることができたように感じる。

しかし、実際にエッセイを書き始めると、なかなか筆が進まず、想定していたよりも時間がかかっていたようだった。単元末に実施した授業に関するアンケートでは、ワークシートの活用やグループワークといった方法は、おおむね良好で効果があったと感じることができた。生徒の自己評価では、過去と現在の読みを比べることで精いっぱいとなり、表現を工夫するところまでに至っていないと判断した生徒が多かった。表現を工夫したり、文章を推敲したりするまでの時間が足りなかったようである。それでも、教材で使用されている修辞法を進んで取り入れてみたり、独自の個性的な感性をもって文章を書いていたり工夫が見られた作品については評価Aとした。評価Aの生徒は、全体で10%未満、評価Bは約80%、評価Cは10%未満であった。実践授業では書いた作品をそのまま提出させたが、提出の際に自らが工夫した表現についてはアンダーラインを引かせるなど、生徒自身の意図を読み取りやすくする工夫をするとよかった。実際の授業では、教材の理解を深める活動が中心となる計画だったため、「4単元の指導計画」については、「書くこと」を軸としたものに書き改めた。

<授業実践7>「文学国語」読むこと

1 単元名

文学作品の表現や言葉のもつ影響について考察しよう。

2 指導目標

(1) 単元の目標

- ・文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深めることができる。〔知識及び技能〕(1)のウ)
- ・人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書に意義と効用について理解を深めることができる。〔知識及び技能〕(2)のイ)
- ・設定した題材に関連する複数の作品などを基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕B「読むこと」(1)のキ)
- ・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。(学びに向かう力、人間性等)

(2) 言語活動

ア 言語活動

映像メディアの特性について理解を深め、他のメディアとも比較しながら、文学作品特有の表現について話し合ったり論述したりする活動。〔思考力、判断力、表現力等〕B「読むこと」(1)のキを参照)

イ 言語活動のねらい

メディアの形式的次元に着目することは、文学作品を新たな側面から捉えることでもある。本単元における言語活動を通して、今後の授業においても多様な読みにつなげていくことのみならず、今まで触れたり読んだりしてきた文学作品のもつ魅力を再認識することも期待される。本単元での学習を通して、新たなものの見方、感じ方を得、表現や言葉のもつ価値への認識を深めたい。

(3) 教材

ア 教材 「メディアと倫理」(『文学国語』筑摩書房)

イ 教材観

この評論はメディアの形式的次元に焦点を当てているメディア論であり、筆者はメディアと私たちがどのようにつながるかを説いている。メディアのコンテンツではなく、形式に着目するという新しい視点をもつ。その上で、写真やライブ中継のみならず、さまざまなメディアの形式がもつ特性が、私たちにもどのような影響をもたらすのかについて考える契機としたい。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

戦争をテーマにした写真をはじめとするさまざまなメディアをコンテンツ(内容)だけではなく、形式に着目し、私たち受け手に与える影響がどのようなものか考察していく。単元の中心では、テレビや新聞等、一般的なメディアのみならず、絵画や文学作品の形式についてもその対象にする。文学作品の内容を理解し、評価することだけではなく、表現や言葉のもつ価値への認識を深める契機としたい。

3 観点別学習状況の評価

(1) 単元の具体的な評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・ 文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深めている。 ・ 人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書に意義と効用について理解を深めている。 	<p>「読むこと」において、設定した題材に関連する複数の作品などを基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めている。</p>	<p>映像メディアの特性について考えたり、文学作品と比較したりする活動を通して、言葉や表現が私たちの感覚に与える影響について理解しようと粘り強く取り組み、自らの学習を改善しようとしている。</p>

(2) 評価方法

ア 知識・技能

行動の観察、ワークシートの記述によって評価する。

イ 思考・判断・表現（読むこと）

行動の観察、ワークシートの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
自分のものの感じ方、考え方を働かせ、言葉がもつ価値への認識を深める。	さまざまなメディアの特性を比較した上で、文学作品に対する見方や考え方を客観的に考察するとともに、作品の解釈や意義について自身の言葉で説明している。	さまざまなメディアの特性を挙げた上で、文学作品に対する見方や考え方について考察するとともに、作品の解釈や意義について説明している。	自分の読んだ文学作品を取り上げ、作品の解釈や意義について説明している。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

行動の観察、ワークシートの記述や振り返りによって評価する。

	評価A	評価B	評価C
ワークシートの振り返りと次の目標によって、取組を改善していく。	戦争に関連したメディアや作品を例示し、効果的に比較しながら、文学作品のもつ表現や言葉の価値について粘り強く考えている。また、自身の体験も踏まえて文学作品の価値や意義について捉え直そうとしている。	戦争に関連した作品を例示し、その作品をどのように捉えたのか、自分なりに考えをまとめようとしている。	戦争に関連した作品を読み、その作品の内容を説明しようとしている。

4 単元の指導計画（配当 4 時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点	◇観点 □点検、観察、確認 ■分析 *「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第1次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> 単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 教科書本文を読み、写真と映像のメディアの形式的次元における「固有のメディア性」について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「戦争の恐怖」の図版を見て、感じたことを話し合い、発表する。 写真とライブ中継放送を比較し、それぞれの形式的次元の特性について把握する。 <p>*「ポイント図解」を配付し、二つのメディアの特性について整理させたい。</p>	<p>◇(知)</p> <p>□「行動の観察」(机間指導)</p> <p>*本文の要旨の把握がうまく進まない生徒には、「ポイント図解」を活用して整理するように助言をする。</p>
第2次 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> さまざまなメディアの形式的次元に着目し、「固有のメディア性」について考察する。 グループ(四人組)で話し合い、発表する。 戦争の状況や悲惨さを伝える作品やメディアの特性について考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「ワークシート」を配付し、インターネット記事やSNS等、複数のメディアごとの特性についても考察する。 まず、自分の考えをワークシートに記入させる。グループの意見をまとめ、発表を比較し、相違点について気付かせる。 「手記」「音声」「絵画」等のように戦争の悲惨さを伝える作品(メディア)を紹介する。 自分の考えをワークシートに記入させた上で、話し合いをさせる。 <p>*各班からの発表も踏まえ、配付した「ワークシート」に各メディアの特性について整理させる。</p>	<p>◇(知)(思)(態)</p> <p>□「行動の確認」(机間指導)</p> <p>□「記述の確認」(ワークシート)</p> <p>*話し合いの際には、他者の発言も参考にさせる。</p> <p>*評価の観点表(ループリック)に留意し、学習目標を確認させる。</p>
第3次 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 戦争をテーマにした小説や物語、エッセイなどの文学作品がもつ影響力について考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時までに取り上げた、各メディアの特性と比較しながら考察させる。 <p>*授業時間に合わせて、今までに読んだことのある作品について、改めて捉え直してみることもよいこととする。</p>	<p>◇(知)(思)(態)</p> <p>■「行動の分析」(机間指導)</p> <p>■「記述の分析」(ワークシート)</p> <p>*評価の観点表(ループリック)に留意し、学習目標を確認させる。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・発表のねらいと評価規準について確認する。 ・戦争の悲惨さを伝える作品やメディアの与える影響について、話し合う。 ・振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> *「虚構」であっても、言葉や表現のもたらすリアリティがどのような影響を与え得るのか、それらの作品を自分がどう受け止めてきたのか等、適宜助言を行う。 ・クラスや生徒の実情に合わせて、作文形式にして提出させることもよい。 ・全体の振り返りをして、活動を通して学んだ点についてワークシートに記入、確認させる。 	
--	--	---	--

5 本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

文学作品にある言葉や表現のもつ影響力について自分なりに考察し、「文学の力はどこにあるのか」や「なぜ文学作品は影響力をもてるのか」等について、自分の考えを的確に発表することができる。

(2) 本時の具体的な評価規準

文学作品にある言葉や表現のもつ影響力について自分なりに考察し、「文学の力はどこにあるのか」や「なぜ文学作品は影響力をもてるのか」等について、自分の考えを的確に発表している。

(3) 本時（3時／4時間）の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容を知り、言語活動の準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ①本時の目標と言語活動について確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ①前時までの学習と言語活動、評価ルーブリックの内容を確認させる。
展開 (40分)	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いに向けて、本時の学習内容について確認する。 ・自分を取り上げた作品について紹介する。 ・戦争をテーマにした文学作品の表現や言葉のもたらす影響について考察する。 ・本時の内容を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ②戦争をテーマにした小説や物語、エッセイなどの文学作品の形式的次元の特徴について考察することを押さえる。 ③メディアの形式的次元に改めて注目した上で、戦争の悲惨さを伝える作品（メディア）にどのようなものがあるか挙げる。 ④教科書本文の論点である「形式的次元（特徴）」について考え、自分の気付いたことをワークシートにメモする。 ⑤本時の「振り返り」を記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ②教科書やワークシート等の内容をもとに話し合う内容について確認させる。 ③今までに読んだことのある作品について、改めて捉え直してみることもよいこととする。 ④ポジショニングマップを参考にし、文学作品と他の「メディア」の形式的特徴の違いについて確認させる。 ⑤本時の活動を通して、学ん

終結 (5分)	・次時の内容を確認する。	⑥班内での話し合いに向け、考察した内容についてまとめる。	だことを整理させる。 ⑥ワークシートへの記述内容や発表の様子を基にルーブリックにより評価することを伝える。
------------	--------------	------------------------------	--

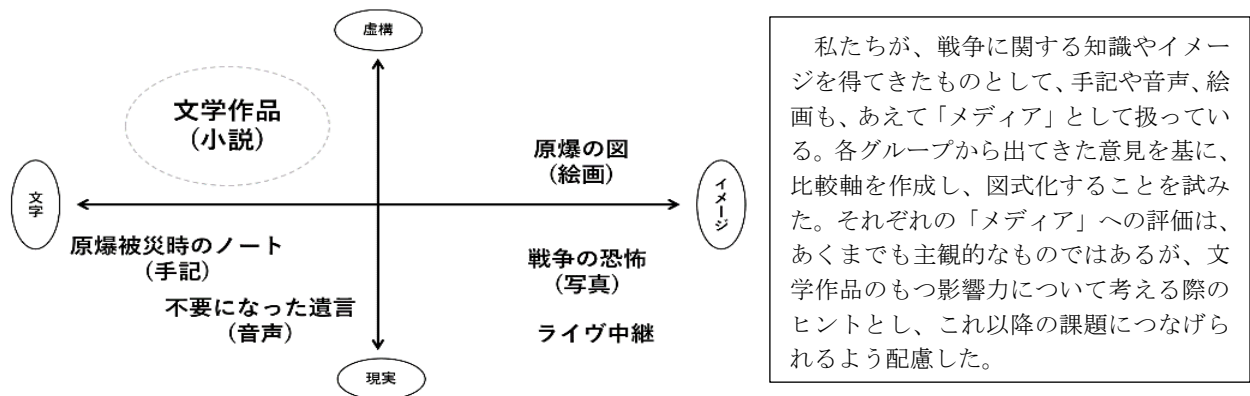
6 研究の実際と考察

(1) 第1～2次における指導と評価（ワークシート 課題1・2）

教科書本文の内容をまとめた「ポイント図解」を活用しながら、筆者の視点を把握した後、「写真」「ライブ中継」以外のメディアの形式についても考察した。生徒自身が日常でもよく触れている「動画メディア」や「SNS」等との比較も行った。本単元では、「文学作品」の言葉や表現がもつ影響力について考察することが言語活動の中心となるが、ここでは筆者の視点を十分に把握するために、一般的なメディアの同時性や信頼性、またそれらの特性について私たちがどのように受容しているのかについて確認する段階にとどめている。ワークシートへの記入や発表の様子から、「知識・技能」の観点で内容の理解度を測った。

【課題1 生徒発表例】

- 「新聞」や「テレビ」等のマス・メディアは他のメディアに比べると信頼性は高い。その信頼性が社会的影響力につながる。規制やチェックをクリアして報じられている印象。テレビの生中継と録画放送には多少の差はあるけど、紙媒体のメディアに比べれば同時性が高いと言える。スマートフォンを持つようになって、多くの人がネットニュースやSNSから情報を得ているけれど、デマやフェイクニュース等もあって、テレビや新聞のもつ影響力とは少し違いがあるような気がする。



【図1】

私たちが、戦争に関する知識やイメージを得てきたものとして、手記や音声、絵画も、あえて「メディア」として扱っている。各グループから出てきた意見を基に、比較軸を作成し、図式化することを試みた。それぞれの「メディア」への評価は、あくまでも主観的なものではあるが、文学作品のもつ影響力について考える際のヒントとし、これ以降の課題につなげられるよう配慮した。

次に、「戦争」に関する知識やイメージは、「テレビ」や「新聞」（一般的なメディア）だけから得たわけではないことを提起し、戦争をテーマにした作品に何があるか思いつくものを出し合った。文学作品の他にも映画や演劇、絵画や音楽等の作品が例に挙げた。この段階では「手記」「音声」「絵画」の三つの「メディア」に限定し、公開されているものを提示した。どのような形式的な特徴に気付き、一般的なメディアとの違いを見出すことができるか、また、その形式的特徴がどのような影響をもたらすのかについてグループごとで意見を出し合い、各グループから出た意見を、ポジショニングマップとして図式化してまとめ、共有を図った（図1）。ワークシートへの記入や発表の様子から、課題3の記述と併せて「思考力・表現力・判断力」の観点で理解の深まりや広がりや測った。

【課題2 グループ発表例】

- 『不要になった遺言』は「声」による表現である。声の抑揚や言葉の詰まりが臨場感を生み、聴く人の心を揺さぶる。『原爆被災時のノート』も実際に経験した人の言葉だから音声と同じような効果がある。ただ、当時の書き言葉で記されているから、私たちには分かりづらいところもあった。
- 『原爆の図』を見たけれど、「絵画」は「写真」と同じように、視覚的なメディアと言える。写真は一瞬を捉えたメディアとして「映像」と対比されるが、絵画はストーリー性をもたせた表現もできるわけだから、ある種「映像」に近い特徴があると言えるのかもしれない。描いた人の伝えたいものが強く出ていたり、色の塗り方で、より酷さが際立ったりして脳裏に焼き付く感覚があった。

(2) 第3次における指導と評価（ワークシート 課題3）

最後に、他のメディアと比較しながら文学作品の形式的特徴がもたらす影響について考えた。自身が読んできた小説や物語等の文学作品を例に挙げて、形式的な特徴について考察することは、自身の読書体験を客観視することにもつながる。本単元では、どの作品を例示するかも生徒に委ねたが、共通の作品を読んで意見を出しあったり、話し合ったりすることでも、十分に単元のねらいを果たせるだろう。それには生徒の実状や授業時間数を考慮して計画したい。本単元では、課題2で共有したポジショニングマップも参考に、小説や物語のもつ形式的な特徴に着目し、考察につなげようと試みた。生徒の発表からは、文学作品の「虚構性」「表現や修辞」「語り」等の特徴を見出している意見が多く、それらが「文学の力」であり「文学の意義」と言及したものもあった。「言葉」のもつ力や可能性について改めて考え直す契機となった。個人でワークシートへ記述させた後に、グループで共有したり、授業者による質問について再度話し合ったりすることで、自己の意見を深められるよう配慮している。ワークシートへの記入や発表の様子と振り返りの記述から併せて「主体的な学習の態度」を見取ることにした。

【課題3 生徒発表例】

- 私たちは、小説や物語、エッセイ等の文学作品を通して、「戦争」の悲惨さについて知っている。何十年も前のことで実際に体験していないのに、戦争を経験した人の悲しみや苦しみをなんとなくでも想像できるのは、文学作品に触れてきたこともあるからだろう。文学作品をひとつの「メディア」として捉えたとき、他のメディアとの最も大きな違いはなんだろうか。小説や物語の中心には、必ず主人公がいて、主人公の視点で「戦争」の悲惨さを捉えることになる。感情移入や疑似体験することができる。主人公の言葉に共感したり同情したり。そう考えると、前の授業で触れた「音声」や「手記」に近いものがある。主人公の「言葉」を通して、情報（戦争）を伝える「メディア」と言える。

7 研究の成果と課題

写真とライブ中継の形式的次元の違いを明らかにし、それぞれの特徴がもたらす影響について考察するという視点の枠組みの中に文学作品を含めて分析してみようというのが本研究の主眼である。前述の言語活動を意義あるものにするために、筆者の立場や論理構成をよく理解するための十分な時間を確保した。「思考力、判断力、表現力等（読むこと）」の目標を達成するための方策として、生徒自身がそれ

ぞれ自由に作品を選び、論じたり発表したりするのではなく、生徒たちが知っている作品を一つ取り上げて、全員でじっくり読み直して意見を交換することもよい。本実践における「課題3」の取り組みは、「文学とは何か」「文学・虚構の力はどこにあるのか」と、本質的な問いにもつながる。今後は、学習指導要領「文学国語」の科目の目標も鑑み、文学作品にある言葉や表現の一つ一つを吟味、評価することにより、自らの感性を磨く契機となるようなものにしていきたい。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価の際には、授業内の反省を読み取るだけでなく、他の2観点の評価と併せて、生徒一人一人の学習の深まりや広がりを見取りたい。また、生徒自身がまとめの記述や振り返りを行うことで、やりがいや達成感をもち、今後の学習の見通しについて結び付けられるものにしていきたい。今後は、まとめの記述と補完し合いながら評価する具体的な方法について、担当者間でも共有していく必要がある。

<授業実践 8> 「古典探究」読むこと

1 単元名

複数の資料を読んだり、調べたりして、描かれた状況や背景を理解する

2 指導目標

(1) 単元の目標

・先人のものの見方、感じ方、考え方に親しみ、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めることができる。〔知識及び技能〕(2)のエ)

・「読むこと」において、古典の作品や文章などに表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえ、人間、社会、自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕A「読むこと」(1)のカ)

・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

(2) 言語活動

ア 言語活動

平安京について複数の資料を読んだり、調べたりして「安元の大火」の状況や問題について報告書にまとめる。

イ 言語活動のねらい

古典の作品や文章は書き手の考え方や書かれた時代の世界観が反映されている。その一方で、当時の常識や風習は書かれないこともある。そこで、『方丈記』が書かれた時代や平安京の状況について研究した複数の書籍を用いて、描かれた時代や平安京の状況を理解し、古典作品に対する自分の考えを広げたり、深めたりさせたい。

(3) 教材

ア 教材 『方丈記』(安元の大火) (『高等学校 古典探究古典編』第一学習社出版)

(資料1) 川尻秋生(2008)『日本の歴史 第四巻 揺れ動く貴族社会』小学館 p256～258

(資料2) 安田政彦(2007)『平安京のニオイ (歴史文化ライブラリー224)』吉川弘文館 p52～55・69～72

イ 教材観

本文や資料の内容を読み取り、描かれた状況を理解する能力を育てるだけでなく、異なる意見を聞いたり、質疑応答をしたりして、それらを自らの意見に関連させ、取り込むことで考えを拡張、深化することにもつながる教材である。また、新たな疑問につなげるなど、探究する姿勢をもたらすことに適した教材である。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

取り組みたいと思える言語活動とするために、古典作品(『方丈記』)の読解だけではなく、『方丈記』が書かれた時代や平安京の状況について研究した複数の書籍を読み、生徒自身が描かれた状況や問題を考えるようにした。自分の考えを基にしながら、グループでの話し合いで新たな気づきを得られるようにし、異なる意見や考え方を取り入れることができるように心がけた。

3 観点別学習状況の評価

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
先人のものの見方、感じ方、考え方に親しみ、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めている。	「読むこと」において、古典の作品や文章などに表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえ、人間、社会、自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりしている。	今までの学習を生かして、複数の資料を読んだり、調べたりする活動を通して、粘り強く文章に書かれたものの見方、感じ方、考え方を理解し、自分の考えを広げたり深めたりしようとしている。

(2) 評価方法

ア 知識・技能

ワークシートの記述によって評価する。

イ 思考・判断・表現（読むこと）

ワークシートの説明文の記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
内容理解（知識・技能）	他の資料を用いて、本文の内容を詳しく説明し、筆者の考えを理解した上で説明している。	本文（「安元の大火」）の内容及び、筆者の考えを説明している。	本文の内容または筆者の考えだけを説明している。
考えの深化・拡張①（思考・判断・表現）	深化・拡張した自らの考えを論拠や構成を工夫して、書いている。	本文（「安元の大火」）と複数の資料を関連付けて書いている。	本文及び複数の資料の内容だけを列挙している。
考えの深化・拡張②（思考・判断・表現）	異なる意見や質疑応答の内容を参考にしたり、取り入れたりして自らの考えを更新している。	異なる意見や質疑応答の内容を自らの意見として取り入れている。	異なる意見や質疑応答の内容を参考にせず、自分の考えだけを書いている。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

行動の観察、ワークシートの振り返りや説明文の記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
ワークシートへの記入（グループ活動への積極的な参加態度） (α)	他の生徒の意見・考えや自らの考えに対する質問・助言などを書き加え、それらに対する自らの考えも書き加えようとしている。	他の生徒の意見や考えをワークシートに書き加え、自らの意見への質問や助言も記入しようとしている。	他の生徒の意見や考えをワークシートに書き加えようとしている。
他の生徒の意見を参考にし、自らの意見や考えを拡張・深化している。 (β)	他の生徒の考えや意見を参考にしたり、自分の考えに関連させたりして、自分の意見を見直したり、深めたりして書き	他の生徒の考えや意見を参考にし、自分の考えや意見を書き直そうとしている。	他の生徒の考えや意見を自らの文章に書き加えようとしている。

	直しを行おうとしている。		
--	--------------	--	--

※ $\alpha \cdot \beta$ は、それぞれ「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」とする。

4 単元の指導計画（配当 4 時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点 * 生徒への支援の手だて	◇ 観点 □ 点検・確認 ■ 分析 * 「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第1次 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 平安時代末期に起きた火事について書かれた随筆を読み、火事の被害状況や描写を把握する。 火事の被害についての作者の感想を把握する。本文を音読する。 	<ul style="list-style-type: none"> 『方丈記（安元の大火）』を読み、火事の被害状況を確認したり、描写を理解したりさせる。 * 本文を理解する上で必要な助動詞や重要古語を必要に応じて確認させる。 作者の感想を確認し、作者の考えを把握させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇（知） □「記述の点検」（発問） * 本文理解に必要な文語のきまり（古語の意味を含む）や古典特有の表現を調べるように助言をする。
第2次 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> 「安元の大火」について確認する。 グループ活動の内容を確認する。 担当する資料の内容を担当者同士で確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 3～4人班（基本班）を作り、「安元の大火」の内容を振り返り、確認させる。 本文及び複数の資料を読み、「安元の大火」に描かれた火災が起きた時の京全体の状況や問題について考えることを確認させる。 前時までの学習内容を振り返り、「安元の大火」に描かれた火災が起きたときの京全体の状況や問題をワークシート①に書かせる。 基本班の中で担当する資料を決める。その後、担当する資料ごとに班を作り、班ごとに資料の読み取りをさせる。 * 班員同士で助言し合い、資料から分かる火災時の京全体の状況 	<ul style="list-style-type: none"> ◇（思） □「行動の確認」（意見交換） * 本文内容についての理解を確認、補強し合うように助言する。 □「記述の確認」（ワークシート） * 必要に応じて文例を提示する。 □「行動の確認」（意見交換） * 班員の助言を参考にさせる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 班に戻り、資料内容を報告し合う。 ・ 「安元の大火」の被害の問題・状況②を書く。 ・ 振り返りを行う。 	<p>や問題について指摘させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 基本班に戻り、担当した資料の内容を班員に報告させる。 * 資料内容について質問したり、考えたことを伝え合ったりさせる。 * 自分が担当した以外の資料などの報告をワークシートに記入する。 ・ ワークシート①と複数の資料内容を踏まえて、「安元の大火」に描かれた火災が起きたときの京全体の状況や問題ワークシート②に書かせる。 ・ 全体の振り返りをして、活動を通して学んだ点を確認させる。 	<p>□ 「行動の確認」(意見交換) * 班員の質問・意見を参考にさせる。</p> <p>◇ (思) ■ 記述の分析(ワークシート、マッピング) * 「ワークシート」の評価の観点表に留意して相互評価をさせる。</p> <p>◇ (思)(態) ■ 「記述の分析」(ワークシート) * 「ワークシート」の評価の観点表に留意して記述させる。</p>
--	---	--	---

5 本時の指導計画

(1) 本時の具体的な目標

平安京について複数の資料を読んだり、調べたりして「安元の大火」の状況や問題について報告書にまとめることができる。

(2) 本時の具体的な評価規準

平安京について複数の資料を読んだり、調べたりして「安元の大火」の状況や問題について報告書にまとめようとしている。

(3) 本時(4時/4時間)の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の学習内容を知る。 	<p>①本時の目標と言語活動について確認する。</p>	<p>①「安元の大火」の本文と複数の資料を使って、被害の問題・状況を考えることを理解させる。</p>
展開 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本班の中で担当する資料を決め、担当する資料ごとに班をつくり、資料を読解する。 	<p>②基本班(3~4人)の中で、担当する資料を決め、資料ごとの班をつくり、資料を読解する。 * 資料から読み取った内容をワークシートに記入する。</p>	<p>②資料を読解し、資料から分かる平安京の状況や様子などを確認させる。</p>

	<p>・基本班に戻り、資料内容を報告する。</p>	<p>*資料①班は川尻(2008)、資料②班は安田(2007)を担当する。それ以外の生徒はタブレットなどで本文の語句や平安京の建物の位置などを調べる。</p> <p>*班員同士で資料の読解についての意見や理解を伝え合い、ワークシートに記入する。</p> <p>③基本となる班に戻り、資料ごとの班で読み取ったり、考えたりしたことを報告する。</p> <p>④資料内容について質問したり、考えたことを伝え合ったりする。質問など書き加える場合は、赤ペンなどを使用する。</p>	<p>班員同士で内容について報告し合い、報告し合った内容や意見を記入させる。</p> <p>③異なる資料から読み取った内容を基にして質問したり、意見を述べたりさせる。</p> <p>④知識や情報を組み合わせたり、関連させたりして、新しい考えを出させる。</p> <p>■質問や意見をワークシートに加筆させ、ループリックにて評価する。</p>
<p>終結 (15分)</p>	<p>・「安元の大火」の被害の問題・状況②を書く。</p> <p>・本単元の内容を振り返る。</p>	<p>⑤「安元の大火」及び資料内容を踏まえて、「安元の大火」の被害の問題・状況をワークシート②に書く。</p> <p>⑥被害の状況に関する他の資料と比べて、「方丈記」の描写や筆者の考え方・状況の捉え方の特徴を考察する。</p> <p>⑦全体の振り返りをして、活動を通して学んだ点を確認し、振り返りを書く。</p>	<p>⑤「安元の大火」の本文に書かれている内容だけでなく、資料で読解した内容も踏まえて、被害の問題・状況を書かせる。</p> <p>■ワークシート②を基にループリックにより評価する。</p> <p>■主体的に学習に取り組む態度のループリックにより評価をする。</p>

6 研究の実際と考察

生徒Aは、問題点を「当時の平安京には、病人や死人」が転がっていることと捉え、資料1、2の内容（平安京には多くの死体が放置されていたこと）と自分の命よりも財産を優先することを関連付けている。そして「人の死に慣れ、事の深刻さに気が付かない人々は愚かである」と意見を述べている。しかし、「屍臭が広がり、衛生面も悪く、とても住みやすい町ではなかった」と資料を基に記述しているが、「自分の命よりも財産を優先する」ことの根拠としては適当でない。また、生徒Bは、「内裏は燃えなかったことが分かる」ことから「天皇は死んでいないので、平安京の政治はきちんと回っていた」という主張（解釈）を書いている。しかし、本文や資料、語句調べなどからの適切な引用がないため、根拠が弱い。

生徒Cは資料（＝本文）の内容を基に「死臭がすごくだよっている」と、火災後の平安京には焼死体の臭いがひどく立ち込めていることを述べている。生徒Dも、本文を一部引用しているが資料の内容を基に「京の人たちは災害に対する危機感がなくなってきたと考えられるため、火が京全体に広がった」と述べている。

本文と複数の資料や語句調べの内容を関連付けたり、俯瞰して（メタ的に）見たりしていないと言える。

生徒Aの「当時は人が死ぬということはそれほど珍しいものではなく、京全体に死体が転がっているというのはあたりまえのことであった」や生徒Cの「死体だらけで、臭いことが、京全体の状況であった」という記述は、資料に基づいた平安時代の京都の社会状況（言い換えれば、日常生活）に着目した意見や解釈と言える。生徒Dの「京の人たちが災害に慣れていたことが被害の問題であった」という記述も資料に基づいた平安時代の京都の社会状況（言い換えれば、日常生活）に着目した意見・解釈と言える。また、生徒Bの「天皇は死んでいないので、平安京の政治はきちんと回っていた」は当時の政治的状況に着目した意見・解釈と言える。

7 研究の成果と課題

実際の授業は6のように展開したが、これでは『方丈記』を火災について記録した史料として扱っただけになっており、文学作品として捉え、筆者の考えや状況の捉え方を考える言語活動になっていないという課題が生じたので、単元の指導計画、本時の指導計画については修正したものを掲載した。この修正は、言語活動もしくはパフォーマンス課題について次の二つの点から行っている。

1点目は、資料や語句調べの内容を踏まえることである。資料1及び2では平安時代の火災の頻度や平安京の衛生面の問題、右京と左京の経済発達の格差などが述べられている。また、語句調べでは、平安京の火災が発生した場所や大内裏で被災した場所について辞書やタブレットを使用して調べる活動を行っている。それらを踏まえ、言語活動・パフォーマンス課題を「本文内容及び資料などの内容を踏まえて、『方丈記（安元の大火）』に描かれた火災が起きた時の京全体の状況や問題について論述しなさい」と設定した。言語活動・パフォーマンス課題の意図は、本文には描かれていない内容を複数の資料で補ったり、語句を調べることで具体的な被害状況を理解したりした上で、「安元の大火」に描かれた問題点を考えることである。しかし、資料に書かれている内容が平安時代の火災の頻度や平安京の衛生面の問題、右京と左京の経済発達の格差などと多岐にわたっているため、生徒は何に着目し、『方丈記』の本文と何に関連させた上で、何を書けばよいのか分からなくなってしまった。そこで、言語活動・パフォーマンス課題を次のように修正した。「『方丈記（安元の大火）』に描かれた火災が起きた時の問題点について、複数の資料の内容及び語句調べと関連させて論述しなさい。なお、問題点は次の三つを設定すること。①当時の平安京の状況を踏まえた問題点②当時の平安京の経済的状況を踏まえた問題点（経済的に何が問題なの？）③政治的な問題点」（以下、修正案1）。その際、火災の範囲を地図上に書かせたり、大内裏の被災場所を確認したりするように促す必要もある。

しかし、修正案1の言語活動・パフォーマンス課題では、『方丈記』を火災について記録した史料として扱っており、指導事項の「古典の作品や文章などに表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえ」ておらず、「人間、社会、自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすること」に至っていない。

『方丈記』を文学作品として捉え、描写や筆者の考え方・状況の捉え方の特徴に着目するように促さなくてはならない。または、『方丈記』（安元の大火）及び資料1、2を読んだ上で、『方丈記』（安元の大火）に込められた意図やねらいを生徒が解釈するように促さなくてはならない。これらを踏まえて、修正案1を再度、次のように修正する（以下、修正案2）。

あなたは「安元の大火」が起きた現場に駆け付けた記者です。『方丈記』及び資料1・2、語句調べを参考にして、平安京の状況とあなたの感想（考え）を複数含めた記事（文章）を一般の読者に向けて書きなさい。その上で、『方丈記』を書いた鴨長明の考え方に言及しながら、平安時代の京都に暮らす「人の営み」についてあなたの考えを書きなさい。

修正案2の「思考・判断・表現（読むこと）」の評価は以下のように設定する。

	評価A	評価B	評価C
内容理解（知識・技能）	他の資料を用いて、本文の内容を詳しく説明し、筆者の考えを理解した上で説明している。	本文（「安元の大火」）の内容及び、筆者の考えを説明している。	本文の内容または筆者の考えだけを説明している。
考えの深化・拡張①（思考・判断・表現）	深化・拡張した自らの考えを論拠や構成を工夫して、書いている。	本文（「安元の大火」）と関連する根拠について資料などを用いて三つ以上挙げている。	本文及び複数の資料の内容のみを列挙している。
考えの深化・拡張②（思考・判断・表現）	「人の営み」についての考えについて、理由も含めて読み手が納得できるように書いてある。 ※『方丈記』の冒頭部とも関連させて書いてある。	・根拠と平安京の状況とあなたの感想（考え）が一貫している。 ・また、「人の営み」について『方丈記』に言及して、自分の考えを書いている。	・『方丈記』の内容に言及していない（もしくはズレている）。 ・根拠と感想（考え）が合致していない。 ・感想・考えを単語のみで書いている。

修正案2に対応したループリックでは、「考え方の深化・拡張②（思考・判断・表現）」を大きく修正した。

修正前の内容は質疑応答の内容を取り入れることの有無が基準となっており、『方丈記』の描写や筆者の考え方・状況の捉え方の特徴を生徒がいかにか考察したか、その内容を評価することができないと考えた。そのため、評価Bを「根拠と考えの一貫性」と『方丈記』「安元の大火」の文末にある「人の営み」に対する考えが書かれていることに変更した。これを基に評価Aは、『方丈記』冒頭の一文や「安元の大火」の文末にある「人の営み」に言及し、読み手が納得することとし、評価Cは、『方丈記』の内容に言及をしていない」や「根拠と感想（考え）が合致していない」ことと修正した。こうすることで、『方丈記』の描写や筆者の考え方・状況の捉え方の特徴に生徒が言及し、特に「人の営み」という「安元の大火」の文末にある「人の営み」に着目することを促すことができると考える。